

2015(平成27)年度 博学連携シンポジウム

大学の“学芸員養成”教育と博物館

—文化の裾野を広げるために—

記 録 集

日時●平成28年2月29日(月) 13:30~15:30

場所●三重大学 メディアホール(総合研究棟Ⅱ)

主催●三重県総合博物館・三重大学・皇學館大学 後援●三重県教育委員会・三重県博物館協会

2017年3月

三重大学 博学連携推進室

ご挨拶

加納哲（三重大学博学連携推進室長 [理事・副学長]）

三重大学は地域創生の政策に呼応し、社会との連携や社会貢献に資するために、地域に根ざした知の支援活動を促進するという目標を掲げています。その実施策のひとつとして、三重県立総合博物館とともに目標に即したシンポジウムを開催してきました。当初は博物館設立に協力して「博物館・大学・県民がつくる学びの輪」、「三重の近代史から地域の明日を探る」、「志摩の自然を活かす～地域と大学と博物館の連携から～」等のテーマで博物館と連携シンポジウムを開催してきました。

今回は三重県立総合博物館が開設され運営が軌道に乗りつつある中で平成 28 年 2 月 29 日に三重大学総合研究棟Ⅱのメディアホールにおいてシンポジウムを開催いたしました。テーマは「大学の“学芸員養成”教育と博物館～文化の裾野を広げるために～」とし、三重大学が地域から求められる大学の役割を果たしてゆくために三重県立総合博物館および皇學館大学とともに実施した企画でございます。本シンポジウムは、地域と博物館と大学をつなぐ人材の育成という観点から今後の“学芸員養成”を考える内容としました。

講演に先立ち、駒田美弘学長から「地域活性化を目指す大学としてこのシンポジウムは大きな推進力になると期待しています」とのメッセージがあり、続いて、三重県総合博物館の布谷和夫館長から「学芸員という人材が何のために必要かを教えることが地域と大学と博物館を結ぶことに繋がる」と挨拶をいただきました。

基調講演は大阪市立自然史博物館の佐久間大輔氏が「ユーザーを育て博物館コミュニティを築く―博物館を社会の中で活かすしかけとしての人材養成プログラム―」という演題で市民と連携できる博物館や学芸員についてお話をいただき大変参考になりました。その後コーディネーターの三重大学山田康彦教授の進行で佐久間氏、海の博物館の石原義剛館長（三重大学客員教授）、皇學館大学文学部の岡野友彦教授（佐川記念神道博物館館長）、三重県総合博物館学芸員の中野千恵氏をパネリストに文化の裾野を広げるために学芸員養成や博物館のあり方について熱心な話し合いが行われました。最後に皇學館大学の清水潔学長から「本日のシンポジウムの内容は、今後の大学の教学の充実のために、地域の博物館を中心とした文化の向上のために、有益な示唆を共有するものであった」とシンポジウムの開催の意義をまとめていただきました。なお参加者は 114 名で 3 つの大学の学生が 47 名も含まれています。それ以外に大学教職員、博物館職員はもとより、一般市民が 18 名参加していただき、会場の出席者を交えて熱心な意見交換がありました。

今後も地域に根ざした知の支援活動を促進するための企画を博物館とともに実施してゆきたいと考えています。皆様からのご理解をいただければ幸いです。

（三重大学 HP および事業実施報告書参照）

シンポジウム

「大学の“学芸員養成”教育と博物館—文化の裾野を広げるために—

山田

定刻となりましたので、三重県総合博物館・三重大学・皇學館大学主催、三重県博物館協会・三重県教育委員会後援による博学連携シンポジウム「大学の“学芸員養成”教育と博物館—文化の裾野を広げるために—」を開催させていただきます。

本当に多くの皆様に参加いただきましてありがとうございます。私は、このシンポジウムの進行を務めさせていただきます三重大学教育学部の教員で、博学連携推進室の室員を兼務しております山田康彦と申します。皆様のご協力のもとに、有意義なシンポジウムにしたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

この博学連携シンポジウムというのは、三重県総合博物館の開館を目指してこれまで数回開催されてきました。しかしながら、総合博物館が開館されてからは初めてのこととなります。そして、3者で主催するという事も初めてになります。今回のシンポジウムは、地域と博物館と大学を繋ぐ人材の育成という広い視点から、今後の学芸員養成教育について展望することを目的としております。

始める前に、映像記録関係のことで、会場の皆様にご了承いただきたい事がございます。記録と広報の関係で、写真を撮らせていただきたいと思っております。御了解いただきたいと思います。それから、今 ZTV さんが入っているんですけども、お顔を映すのは困るという方がございましたら手を挙げて頂いて、その方については絶対に映さないようにすると言われております。そういうご希望の方、いらっしゃいますでしょうか。宜しいでしょうか。それではご了承いただいたという事で、進めさせていただきます。それでは、最初に主催者を代表して、駒田美弘三重大学学長、そして布谷知夫三重県総合博物館館長のお2人から、開会の御挨拶をいただきます。それでは、駒田学長、よろしく願いします。

駒田

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました三重大学の学長の駒田です。今日は博学連携シンポジウムということで、ご参加をいただきましてありがとうございます。また、基調講演をお願いいたしました佐久間大輔先生、遠くから、まあ遠くと言っても大阪ですから何度も来られているそうですが、とにかくありがとうございます。また石原先生、岡野先生、中村先生にも、パネラーを引き受けて頂き、感謝を申し上げたいと思います。

今回のシンポジウムは、先ほど山田先生も仰いましたように、三重県の総合博物館、それから皇學館大学の皆様と一緒に、三重大学が開催をさせていただくということで、今回ご準備をいただきました山田先生はじめ関係者の皆様方に厚く御礼申し上げたいと思います。

今日は副題が「裾野を広げる」ということですが、今日の参加者の皆様方の顔ぶれを見ておりますと、年齢も極めて裾野が広いですし、服装もまた裾野が非常に広がってですね、恐らく専門の分野も、様々な方が来られていると思います。まさに、この博学連携シンポジウムに相応しい参加者の皆様方だなあ、というふうに思いました。

三重大学は昨年から、いわゆる学則、学則と言うのは大学の「憲法」なのですが、それを変更しまして、地域を活性化したい、地域創生の努力をするという事を明記致しました。平たく言えば、それが本学の役目でありまして、責務を負った、ということになります。今回このパネルディスカッションでは、先ほど山田先生も仰いましたように、地域コミュニティを築いていく、裾野を広げて地域の中心として博物館と大学が、地域に対して何かできることを考えていく、あるいはお教えいただくということです。私たち三重大学もそうなのですが、地域を活性化していく上で、このシンポジウム自体が大きな推進力になるかもしれませんし、地域自体にも非常に参考になるものではないかというように思っています。今日も来られている先輩の先生方は勿論なのですが、特に若い皆様方が、将来地域を活性化していく推進力となっていただく、それは文化の面からかもしれませんが、そのように関わっていただくことは、地域の活性化の大きなヒントとなるのではないかと期待いたしております。

そうした意味で、今日佐久間先生の「ユーザーを育て博物館コミュニティを築く」、いわゆるコミュニティの中で博物館がどういう任務の中心となっていくのかをお教えいただくということで、私も拝聴できることを非常に期待して参りました。またパネルディスカッションでも、博物館、あるいは大学が、文化研究という面から地方創生を推進していくためには、どういうふうな役目を担っていくのかということ、それぞれのパネラーの方からお教えいただくということで、これもまた非常にプロダクティブなものではないかなというように思っています。

ご出席の皆様方も、ぜひともパネルディスカッションに参加していただいて盛り上げていただき、地域創生、地域活性化のアイデアを共有していくことができれば、と思っております。よろしく願い申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

山田

では次に、布谷知夫三重県総合博物館館長さん、よろしくお願いいたします。

布谷

はい、皆さんこんにちは。三重県総合博物館館長の布谷と申します。本当にたくさんの方にご参加いただいて、とてもうれしく思っているところです。山田先生や学長さんからお話がありましたように、この三重県総合博物館が準備に入った頃に大学との連携事業を始めて、今回このシンポジウムとしては7回目になります。今回は皇學館大学さんも一緒に、3者の共催としてやっております。特に今回については三重大学さんに準備と運営全てをお任せしておりまして、その点、本当にありがたく思っております。佐久間さんはじめ、今日のパネラーを引き受けていただいた方、ありがとうございます。学芸員養成ということが一つのテーマになっておりますけれども、学芸員養成についてはここに来ていらっしゃる方、おそらくそのことに関心を持っていらっしゃる方が多いと思うのですが、非常に大きな課題もあります。

日本で今、学芸員資格を出している講座を持つ大学というのが、4年生大学で291あります。それから短大が9つですね、ちょうど300の大学等で学芸員資格を出しています。そして、一年間に学芸員として資格を持って卒業する方が、大体1万人と少しです。

この数字は、この 10 数年変わらないですね。昨年が 1 万 54 人だったと、本に書いてありました。ところがそれに対して、学芸員資格を持って博物館に就職する方が、正規、嘱託を合わせて大体 100 人です。この数もこの 10 年間変わっていません。だから大多数の方は、資格を持ったけれども、博物館には就職できていないということですね。そういう現実があるわけです。

この原因は簡単な話で、これも数字を挙げますと、日本には博物館が今、公式に言うと 5 千 7 百数十あります。それに対して、日本の学芸員及び嘱託学芸員の数というのが 7 千人少しです。つまり単純に平均すると 1 館が 1.3 人くらいで、三重県総合博物館では嘱託を含めて 25 人おりますから、おそらく 0 とか、1 人というところが圧倒的に多いということになります。というのが、今の日本の現状なんですよ。

そういう中で、今から 6、7 年前ですね、博物館法を改正しようという大議論がありました。およそ 3 年間をかけて随分いろんな大学も含め、博物館業界も含めて議論したんだけど、法律上はほとんど変わらずに、必要単位が 12 単位から 19 単位に変わったということが大きな変化でしたけども、制度については全く変わりませんでした。その時、学芸員資格というのはどういう状態を目指すのかという議論も、随分されたわけですね。大きく 2 つの意見がありました。それは、1 万人もいるのだから、最初からファンを育てるのでいいのではないかと、博物館(学芸員)資格はとにかく出すとしても、目的は“よく知っているファンを作る”ことであろうと、というのがひとつの意見です。もうひとつの意見が、やはり本格的に質の高い学芸員を作るべきで、大学では博物館学芸員資格に上級中級を作って、質を確保しよう。という議論がありました。これについては結論が出ないまま、博物館法にも反映されませんでした。というのが、学芸員を巡る一つの大きな課題です。



これに対して、今日の大きなテーマになっています、地域と大学と博物館を結ぶという課題がありますね。おそらく、先ほどの 2 つの両極端はどちらもまずいだろうと思います。両方の意味はあり、どちらかに決めるのは非常に難しいわけです。ただ、全然別の見方をすると、博物館学というものの中に、もっと博物館のあり方だとか、博物館は世

の中にどう役に立つのかとか、単に博物館資料の取り扱いを学ぶのではなくて、学芸員という人材が何のために必要かとか、そういうことをきちんと教える必要があるだろうと思います。そのことをもって、地域と大学と博物館を結ぶことに繋がるだろう、というふうに思っております。そんなことを考えていたんですが、実際にそれをやるにはものすごく大きな課題がたくさんありますね。そういう意味で、今日は佐久間さんやパネラーの方々から、これからの学芸員の在り方みたいなこと、あるいは大学での学芸員実習、博物館での学芸員実習のあり方みたいなことについて色々議論していただいて、教えていただければありがたいなと思って聞かせていただきます。どうもありがとうございます。

山田

どうもありがとうございます。それでは早速基調講演に入らせていただきます。基調講演は、大阪市立自然史博物館で主任学芸員をされています佐久間大輔様をお願いしております。テーマは「ユーザーを育て、博物館コミュニティを築く-博物館を社会の中で生かす仕掛けとしての人材養成プログラム-」となっています。講演資料は配布資料の中にご覧いただけますのでご確認ください。もしないという方は受付にご覧いただけますので合図をしていただければと思います。

佐久間様は植物生態学、特に菌類がご専門です。しかし同時に、“学芸員実習は教育普及の一環”というご指摘をされるなど、博物館にパートナーシップやネットワークを形成していくことの大切さなど、博物館の運営の在り方にも積極的な発言をされています。大変興味深く、刺激的なお話をいただけるのではないかと期待させていただいております。それでは佐久間様、どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

【基調講演】

佐久間大輔 「ユーザーを育て博物館コミュニティを築く －博物館を社会の中で活かすしかけとしての人材育成プログラム－」



佐久間大輔

ご紹介をいただきました大阪市立自然史博物館の佐久間と申します。よろしくお願いたします。ご紹介もそうなんですけど、布谷さんのご挨拶が、これはもう 30 分喋ってもらって基調講演やってもらった方がいいんじゃないだろうかと思ってます (笑)。

私は、もうそろそろ大阪市立自然史博物館というところに勤めて 20 年になります。早いもので、それこそ 20 年前の今日、2 月 29 日に学芸員の採用試験を受けて、面接をしたのを覚えています。それからもう夢の如しじゃないですけど、一瞬にして今に至ってしまっているわけなんですけど、その中で色々思ってきたこと、博物館ってこうなってったらもっと面白いのになと思うようなこと、それからこうなって行って欲しいという願い、色々なことを今日はお話しさせていただきたいと思います。少し盛りだくさんになり過ぎて早口になるかもしれませんが、その辺はご了承ください。

少し自分の出自の事を言うておくところという感じです。講演の最中でも、Twitter でも Facebook でも何かコメントを入れて頂ければ、後のディスカッションでも答えられる範囲は答えますし、後でご意見なんかを送っていただいても幸いです。

私はもうキノコのことだけではなく色々なことをやっていたりしますので、そんな中から「博物館には多様な役割があるはず」というのを思うようになってきたんですけども、一番最初はこの辺から入っていきたいと思います。お配りしたレジュメは必ずしもその順に沿わずにプレゼンをしていくかもしれませんが、後でまた、こんな話を言いたかったんだなということを見返すネタにさせていただければと思います。

最初に、博物館というのは多様な役割があるはずだという、そこから少し話していきたいと思います。

明日から 3 月になるわけなんですけども、5 年前に私たちが何をしてたかといいますと、陸前高田市立博物館というのが岩手県にあります。この博物館は 2 階を超える高さ

で津波が襲いまして、ここに所属の学芸員さんが皆さんお亡くなりになってしまったという、悲惨な状態になってしまった博物館です。1人、ここの元の学芸員が生き残っております、その方を中心に復興、標本のレスキューを始めたんですけど、津波の映像を見たときに、僕らはこの博物館を知っていたもので、やばいなという感覚と、ここにはかなり大事な標本が沢山あったことも知っていましたので、これはちょっと覚悟をした上で現場を確認に行かなければいけないなというのを、津波(震災)当日、同僚の学芸員と話していたのを覚えています。

最初は人命救助、ご遺体の捜索というのが最初に動いて、博物館に関して動けるのはその混乱がある程度落ち着いてからじゃないと無理だろうと思ったんですけど、実際にゴールデンウィークの直前くらいになって、ようやく博物館に入れる、岩手県博が陸前高田の博物館に入った、それで標本が残ってるから、潮に濡れてる分もあるからそれをどうにかしたい、という話があって、それを全国の自然史系博物館の仲間たちと一緒に標本をもう一回乾かして、データはちゃんと残して、いつの日か陸前高田の博物館を復活できるときに再生できるようにということで、標本レスキューというのをやりました。

仏像とか考古遺物とかと違って、昆虫だとか植物だとか、キノコだとか、そういった標本を、手間かけて残す必要はあるの？植物はもう一回山に行ったら採れるんじゃないの？といった話もありました。だけど私たちは、「明治時代に採られた、明治時代の植物標本は、タイムマシンがない限り採りに行けませんよね」と答えました。前回の三陸大津波の前の標本までであるわけです。今はなくなってしまった高田の松原の、その松林の下に生えていた植物の標本もたくさんあるわけです。どういうことかと言うと、これから陸前高田は防潮堤を築いて復興させます。いつの日か防潮堤で壊してしまった自然も取り戻したいという話が出てくるでしょう。高田の松原は、再生させるという方向で話が動いています。ただ、高田の松原は、松をもう一回植えたら、復興したって言えるものじゃないですよ。本当はそこに生きている昆虫だとか植物だとか、キノコも含めて、そういったものが復興して初めて”陸前高田の「高田の松原」は復興できた”と言うべきです。その参考になるものが、実はこの博物館にあったというわけです。それだけじゃなくて、この博物館、鳥羽源蔵さんという明治期のナチュラリストが残した資料を基にして作った博物館なんです。この人はものすごく地元で尊敬されている人でしたし、やはり陸前高田の考古学から歴史から自然のことから、みんなこの人が語ってきたストーリーというのがあって、それが自然に博物館になっていたわけです。

つまり、陸前高田ってどういう町？って言ったときに、この人のなしてきたことをきちんと残すことが、町のアイデンティティに繋がるんです。陸前高田の町はどういう町だったって言うときに、その町の博物館、うちの町はこういう町なんだっていうことが、山も谷も削って復興してなくなってしまったときに、それ以前の営みというのをずっと繋ぐというのが、博物館のすごく大きな役割だったんじゃないか。だから、町の営み、そこで活動してきた、変化してしまった自然のこと、色んなことを全部まとめて残していくというのが博物館のひとつの役割なんだと。世代を超えて繋いでいくアーカイブですね。こうした認識から話を始めていきましょう。

例えばうちの博物館、大阪の長居というところにあります。地下に収蔵庫があって、植物の標本は、押し花の標本が大体 30 万枚あります。大阪の町、というよりは近畿の自然

をずっと記録してきてます。この標本たちは、本当に色々なところのレッドリスト、三重県のレッドリストにもかなり参照されています。それから、この地域にはこんな植物があるんだ、という目録ですね。そういったもののベースになっています。つまりこういう関西、近畿の自然の、生物多様性を考えて行こう、ここが自然豊かだから自然保護区にしようとか、自然保護区にしてもし開発を止めようということになったら誰かの権利をちょっと抑えてしまうと、そういう判断を行政がするんだったら、そう判断した科学的証拠はあるのかという話に当然なります。じゃあその科学的証拠はどこにあるということになったら、それは博物館の標本ということになるんですね。

博物館の収蔵標本というのは町の記録であり、町のこれからを作っていく参考資料となっていくわけなんです。そういうのを私たちは、収集・保管という形で標本を採っているんですが、実はこういうのは収集保管だけではなくて、さっき町のアイデンティティって言いましたけど、実は色々なことの気づきにも繋がっていく。

私は博物館がやっている事ごとってというのは、全部繋がっていることなんだと思います。これはキノコの特別展をやった時の例です。キノコに関するいろいろなことを、5年ほど前に展示をさせていただきました。展示をしましたところ、にぎやかな空間になって、キノコの絵画とか、南方熊楠が採ったキノコの標本なんかも含め、色々なものを展示させていただきました。そうすると、キノコが好きな人たちが集まってそこで議論をするようになったりだとか、“キノコってカワイイ！”という興味だけを持ってきた人たちが、意外とディープな世界というのに気づいたりだとか、そうやってキノコを巡る人の輪ができました。

こういう展示をやるためには、当然キノコの標本がないとできませんが、良いキノコの標本ってどうやったら集まると思えますか。全部私が行って採ってくるというのは、難しいです。キノコがいつどこに出てくるかわかりませんもんね。例えば、カゴタケっていうのが突然出たってニュースが入ってきたら僕が採りに行けるんですけど、でもそのニュースを教えてくれるのが誰かという、マスコミじゃない。それを知っている人が見つけて、これは面白いものだから博物館に知らせなきゃと思ってくれて、初めてそのニュースが伝わるわけです。

もっと言えば、山で歩いていて面白いキノコが見つかった時に、このキノコは面白いキノコだと言ってそれが普通のキノコか面白いキノコかというのは、目利きがなければわからないですね。よくあるキノコなのか、よくあるけどこれは典型的な形をしているから綺麗な標本だと思うのか。あるいは珍しいキノコだということをちゃんと知っているのか。それは、山を歩いている人がどの程度キノコを知っているのかにかかっています。だから実はこういう展示会をやるためには、どのくらい博物館の周りにキノコに詳しい人があらかじめいるか。

この展示会をやる5年も10年も前から私はキノコの観察会をやっていますけど、その中で、キノコに興味を持った人に、キノコの標本の採り方はこうやってやるんだよ、面白いキノコっていうのはこういうのがあるよってのを教えておくわけですね。教えて、興味を持った人が、「おっ、これは」っていうのを見つけて持ってくる。まあ最初は持ってくる時にビニール袋に入れてグチャグチャに壊れちゃってるかもしれない。正直、結構多いんです。だけどこれはすごい面白いキノコなんですけど、こうやったらもっときれいに持

って来られるんですよ、ってというような採り方を教える、写真の撮影の仕方を教える。博物館の方でも、どう受け取ったらいい状態で標本が作れるか、こっちも研究する。お互いステップアップしていくわけですけど、そうすると大阪中から色々キノコが集まるようになるわけです。そうすると、綺麗な標本でもって、楽しい見栄えのする展示ができる。

こういう展示をすると、もうちょっと離れた所にいた、キノコを専門でやってる人たちからも、これだけ標本をちゃんと扱ってくれる博物館だったら私の標本も博物館にもらってくれないかみたいなことにもなる。そうやって標本が集まって何ができていこうと、大阪のキノコの目録が作れたりとか、レッドリストが作れたりとか、或いは僕の研究として何か論文が書けたりとか、そういう方向になっていくわけです。

一番最初は何かと言ったら、単純にキノコの観察会なんです。で、キノコの観察会から資料収集・研究、それで展示につなげる。展示に繋がると、さっき言いましたよね。キノコってカワイイって思ってた人がディープな世界に気付く。そこからまた観察会に来たくなるという人が出てきます。

私たちが博物館でやっていくことってというのは、こういうことなんじゃないかと思うんです。博物館のゴールは展示を見に来てもらうことなのかって言ったら、必ずしもそうではない。勿論展示は見に来てもらいたい。でも博物館行ってア面白かった、じゃあ帰ろう、で翌日から何も関係なく普通にお仕事、普通にお勉強だったら、私たちとしては目標は達してないんです。それはその人たちが、博物館に行った、面白かった、今度の日曜日には、実際に山に行ってみてみたい、もうちょっと自然の事を学びに自分で行ってみたいと思って、その動機付けに博物館がなったのであるとしたら、それが上手くいったということだと思っています。

だから私たちが目指したいのは、“博物館に来れば、次の週も博物館に来たい”ではなくて、“博物館に来れば、次は野外に出かけてみたくなる”ということです。まあ野外に行ってもそれでわかるって人はまずいませんから、野外に行ってもわからなかったらまた博物館に来てほしい。こないだこんなもの見つけたんですけど、って質問しに博物館に来ます。でそうすると僕らがわかる範囲で答えて、こういうキノコだったらね、裏側の所をちょっと気を付けて今度写真撮ってみてくださいとか、ぜひ採集して持って帰ってみてくださいとか、色々コメントします。そうすると、次の観察ポイントが分かって、ステップアップに繋がっていく。同時に、その人がこんなもの見たんですけど、時として博物館に面白い情報をもたらしてくれる。勿論その仕掛けとしては、僕らが野外に連れていくってこともたくさんやるんですけど、博物館は知識を与えるというよりは、気づきのきっかけを与えて、その人が一歩前へ進む、僕らは自然の博物館ですから、自然に関して興味を持ってもらう。まあ古代歴史の博物館だったら、自分の地域に興味を持ってもらうとか、色々なことがあるんだと思います。美術館でもそうです。自分のイマジネーションが広がるだとかいうことがある。僕らは自然史博物館に関してはこういうことが一つきっかけを作るといことになるんだというふうに思います。だから気づきの機会を作っていくための活動っていうのが私たち博物館にとっては色々なことがあるんじゃないかと思います。

博物館って場所は、博物館の中で飲み食いがしづらいついていうのがありますよね。勿論中に食堂があるスペースもありますし、それから飲食スペースはここですよーっていう

場合もあるんですけど、水族館行って、この魚旨そうだなって思った経験ありません？あんまりないですかね？僕らキノコの観察会やるとね、すぐにお客さんは“このキノコ食べられますか？”って聞くんですよ。やっぱりみんな食に繋がるとはね。これは同僚が昆虫の観察会やっても絶対にそんな質問は出ません。キノコだけなんですけど、一回（だけ）は食べますよ（笑）、とか色んな答え方するんですけどね。だけど博物館の、館の中で中々そういう話って、実感を伴って出来ないんですよ。大阪は残念ながら食の町じゃないですか。これ生物多様性の話をすると、大阪は食の話から入らないと掴みがいけないってところもあるんですね。京都はもっと難しかったですよ。僕は住んでるのが京都なので、京都でも生物多様性の講演とかさせていただくこともあるんですけど、京都だとお茶の世界。お茶の中には生きものを愛でるだけでなく、自然の恵みを使う文化が入ってますよね。この炭はクヌギの木を使ってやっているわけですけども、炭焼きやる人が殆どいなくなっちゃったとか、生きている花が、今の季節だったら桃の枝花が生けてあります。桃の枝花っていうのはただ桃の木があれば採れるものではなくて、わざわざ一度伐って、そこからヒコバエのようにシューっと枝が沢山伸びてくるわけですよ。それを使わないとあんな格好のいい枝花は作れないんですよとか、そういう雅な文化の世界で掴まないと、なかなか京都の人たちは生物多様性の世界に入ってくない。それが大阪の場合では食べ物です。

じゃあどうするかって言うと、食べ物のお話をカフェでやったりとか、カフェじゃ結局飽き足らなくなって居酒屋でやりましたね。居酒屋で公開講演会です。だからサイエンスカフェってありますが、サイエンスカフェで気取って話してるうちは、本当の生物多様性の話にはできない。居酒屋トークで生物多様性の話がちゃんとできるようになると、だいぶ広がってくるよって話なんです。こういうのもやっぱり博物館に来る、学校に学びに来る、っていうのはちょっと違う人たちに対して、気づきっていうものを作れるチャンスでもあるんですよ。

こんなのもやりました。だいぶ前になりますけど、2008年に一応地震展を大阪でやってたってのを、自慢というか大事なことだと思ってるので言っておきたいと思います。2011年の後で地震展の企画だったら、そりゃやらなきゃねってことなんですけど…。関西では、1995年に阪神淡路大震災がありました。それで10年ちょっと経って、やっぱり南海大地震は気にしとかなきゃいけないってことで、地震のメカニズムだとか、どういったところでどういう風な形で地震が想定されてるんだという特別展をやったわけです。冬場にやったので、冬場って中々難しい展示だったんですけど、1万人くらい人が来てくれました。この時にもうアスペリティっていう…プレートの中がひっつきながらずれるっていうスロースリップみたいな話を、東日本大震災の時の大きなメカニズムのひとつだったやつなんですけど、そんな展示をやったりしました。

こういうことをやるっていうのは、大阪の街の中で地震が起こるっていうのを、普通の人に、科学的に考えてもらうための、すごく大きなきっかけになるものなんです。要するにマスコミがやるとか、行政がやるとかっていうのはちょっと違った感覚があります。やっぱり博物館でやるっていうのは科学的なディスカッションの場になりやすいんですよ。冷静に議論ができます。それから展示に対する信頼性が高いので、マスコミがやるより高いのかもしれないと思うくらい、しっかり取り組んでくれます。それから、やっぱり

敷居が低いです。これをやったからわざわざ来てくれた学校も、遠足シーズンでもないのに学校団体なんかも来てくれました。そういうような効果はあります。

こういう色んな人に、キノコの話も食い物の話も地震の話も、色んな気づきを与えるための舞台として、博物館っていうのは機能しているんだってこと。1つ目のポイントでした。

もう一つは、こちらの三重県博なんかはこういう機能を重視しているのかもしれませんが、私たちは出会う場所というのも博物館の大きな機能だと思っています。スライドに出したのは、うちの博物館のいわゆる文化祭みたいなやつです。うちの博物館では大阪自然史フェスティバルっていうのを、時々バードフェスティバルに変えたりとか、バードフェスティバルの場合は鳥関係団体ばかりが集まってくるんですけど、去年 2015 年はバードフェスティバルで、鳥に関連した市民活動をやってる団体、それから野鳥観察の双眼鏡を作っているメーカーさん、そういうのも出展されて、大体 50 団体でした。鳥に限らないでなんでもありですよって形で、自然保護とか自然科学をちゃんとやってるところだったら大丈夫ですよって形でやると、大体 100 団体超える出展があります。まあお祭り騒ぎです。で、無料で開放するので、2 日間で 2 万人来てくれる。さっきの地震展が有料でやるもんですから、2 ヶ月近くやって 1 万人っていう数字とは大分話が違うんですけども、2 万人の来場者があるってことだけじゃなくて、出展団体の 100 団体が、隣のブースとか他所のブースと繋がるチャンスになるっていうのが重要ですね。で、こういうところに出展すると、両方とも責任者みたいな人がもう 20 年くらい前にうちの博物館の友の会から出て活動はじめたみたいな人で、何年振りみたいな話で盛り上がったりするんですけども、出展者はお互い博物館を繋ぎ手としてお互いが大阪の色々な自然保護団体とかアマチュアグループが、トンボ専門のグループがあんねんなあとか、キノコの人たちに聞いたら分かるねんとか、そういう横のつながりを持てるんですね。逆に言うと、昆虫のグループは昆虫のグループ同士でライバル視したり、あそこの（出展）が子供集めてすごい人気だったから今年は負けんとか、そういう切磋琢磨があります。

要するに博物館に集まるアマチュアグループってすごいたくさんあるんですよ。それこそキノコ専門とか、昆虫、トンボ、カメムシ専門とかそういうグループもあるんですけど、まあ言うならマニアの人たちです。まあマニアの人達はその分野の研究者が何者？ってびっくりするくらい、たくさんの知識を持っています。ちょっとかたよっているかもしれないけど、本当にプロとしてそれでご飯食べてる人と同等、あるいはそれ以上の知識を持っている場合もあります。この人たちは自分が好きだからやっているんですけど、その姿ってすごく吸引力を持っているわけです。秋葉原がオタクの街と言われますけど、あれは好きなものに一生懸命な人たちが集まっているから、何かおどろおどろしいような魅力があるわけですよ。

自然史博物館もそうです。要するに昆虫マニアの人がこれはここが面白いと、その人が本当に面白がっていると、周りの人も面白がれるわけです。自分が面白くなくて、カメムシってこんな昆虫でねって言ったって誰の心にも響かない。いや役に立つかは知らんけどこいつ面白いねん、ていうふうに言っている人の姿っていうのは惹かれるものがありますね。いやもしかしたら僕がそういう癖を持っているからかもしれませんが。マニアの人たち、好きな人たち、すごく熱心な人たちは、博物館の周りにあるすごく強いコンテンツです。その人たちが、これはこういうところが面白い、だからちゃんと自然保護をし

なければならぬとか、そういうことを言い出した時に、すごく説得力を持ちます。オリジナルのストーリーを持っているからだと思えますけど、すごく強い説得力を持っている、魅力的なコンテンツになる。それはその人たちが語るチャンスを得て、もっと言えば語るノウハウを持てば、もっと広がることですよ。

私たち、この自然史フェスティバルっていうのに、色んな人たちに出展してもらってます。そうすると、最初の頃はポスターに難しい言葉を並べて、ただ標本を並べていただけの人が、どうやったら子供さんにこの虫の魅力を伝えられるかとか、そういったことを意識します。つまりそのマニアの人たちが、伝えることに喜びを見出しだして、語るスキルを身に着けだしているんです。1回じゃダメで、2回、3回、4回と出展していくと、やっぱりそのスキルが上がっていくんですよ。綺麗なパネル、見やすいパネル作るようになります。学生の皆さんも学会発表1回目はメタメタかもしれないけど、2回目3回目になると上手に話すようになっていきます。だから語る場を持つということは、生涯学習の中ですごく大事だと昔からいわれていることなんですけど、博物館の周りのアマチュアさんたちがお互いに繋がって、その外の普通の人たちとも繋がってっていうチャンスを作るっていうことは、博物館の大きな機能かなあというふうに思います。

さて、色んなことを言いましたが、そんな博物館に求められる学芸員像、こんなに色んなことをやる博物館と言いながら、実は学芸員養成課程っていうのは元々は資料に向き合うスキルと研究能力みたいなことを、結構要求してる部分があったんじゃないかなあと思います。それは勿論必要なんですけど、それでも同じように研究をやる大学に求められるスキルと、或いは地方の試験研究機関に求められるスキルと博物館とでは、だいぶ違うような気がします。ちょっとだけ他の社会教育施設と何が違うのかということについて考えてみたいと思います。

例えば図書館。今図書館は色々話題です。コーヒー屋さんを併設する図書館とかね。色々賑やかです。図書館はどこの街にもあります。博物館はどこの街にもあるとは言えません。自然史系博物館なんてどこにでもあるとはとてもとても言えない状態です。それに比べると図書館はやっぱりどこの街にもある。知識のデータは図書館にある、っていうことがベースになってるんですよ。学校の教科書でも図書館に行って調べてみましょう、あるいは図書室で調べ学習をしましょう、これは普通にやることなんです。なので、その敷居はすごく低い。最近では図書館に行って調べるじゃなくて、ケータイで検索して調べるっていうのが普通になりつつありますから、図書館で調べものというの、図書館の側が危機感を覚えている状況なんですけども。

図書館は基本的にはどこに行っても同じように本が探せて、同じように質問ができて、同じように本が借りられる、っていう、基本規格化されたサービスがあったんですけど、だから個性っていうのが出にくかったんですが、最近はそうじゃなくて、さっきうちの博物館でやってたような、他の団体と出会うような場としての機能を重視するような図書館も出てきました。写真に出したのは東京の日比谷文化館ってところですけど、ここは博物館と図書館の融合みたいな施設です。そういった形で新しい図書館の姿を求めるようなところも出てきています。そうじゃなくて、もうちょっと喫茶店で談笑するような「軽い」答えを求めている自治体もあります。まあ色んな形で、図書館ってのも形を探っている。

じゃあ公民館。これ中々とらえどころがないんですけど、これ社会教育主事っていう専門職がいます。図書館は司書がいる。公民館は社会教育主事。これは地域の課題を解決するためにいろいろなところのコーディネートをやるっていう形になってるんですけど、あまりこの人たちに地域の研究をするというような環境がないように見えますね。専門領域中心じゃなくて地域密着というのが一つのテーマになっています。

今言ったような図書館、公民館と博物館を比べると、アウトプットの仕方が全然違うなあと思ったんです。図書館とか公民館っていうのは、やっぱりコミュニティも築きにくいし、自分たちがコンテンツを作っていくってことはあんまりないんです。そういう意味からすると、博物館は展示も作る、研究論文も本も作る、それから行事をやって博物館の周りにたくさん団体を築いていく、集めていくってことができるので、活動をやっていく上でのアウトプットが大分と違うなあとということがあります。そうするとコアになる人材も当然違っている。まあ司書・教育主事に関してはこういうふうに書きましたが、学芸員は基本的にはやっぱり専門性が求められるわけなんです。ただ、館の個性もあるので、規格化した教育がしづらいというのがあります。自然史系と歴史系とでもやっぱり専門性が違うんで、その専門性の部分を教えていくっていうのは中々難しいことなんです。もう一回繰り返してますが、多彩なアウトプットを求められるっていうのが、学芸員のひとつの特色です。本当に多彩な質問に対応もしなきゃいけないし、資料も本当に普通に大学で、例えば大学院でマスター、ドクターとやって、自分の専門分野、僕ならキノコやりましたって言っても、博物館に就職したとたん、今まで扱ったことのないようなちっちゃなキノコからカビから変形菌から、あまりやったことのなかったサルノコシカケの仲間とか、難しいなあ、と思って敬遠してた部分も全部否応なしに、専門家が来たとかって任せられますから。でそのうちに、まあコケも隠花植物だから一緒やろ、お前やれとかって言われますし、やっぱり非常に幅の広さが求められます。これ、うちの博物館は他にも生物の学芸員いるからいいんですけど、ちっちゃな博物館になると、カエルから虫から植物から全部一人の学芸員で扱わなきゃいけないなんてことはざらにあります。それら全部一人でやろうって…。それからさっき言った色んな業務、コーディネートとか含めてそれも全部自分でやろうと思ったら、パンクします。

で、博物館がスタンドアロンで機能できると思わない方がいい。色んな人と一緒に解決しにかかっていくという方が、機能できるんじゃないかということ、僕は繰り返し色んな所で言ってます。どういうモデルかっていうと、博物館って結局人材はすごい、うちの博物館って大阪の自然史系の中では大きい方ですけど、博物館だけが何か語ったところで、影響を与えられる範囲ってすごく狭いんですよ。それよりは、周りにたくさん人がいるので、この人たちから口伝えで伝えてくれることってものすごく大きく広がるし、博物館が育ててるサークルだとか、支援している団体だとか学会だとか色んな所がまた周りに影響してくれると、ものすごい博物館の与えられる影響の範囲が広がる、ということです。

なんでも自分の博物館だけでできると思わない方がいいということです。うちの博物館で15人ですけど、この学芸員だけで社会に自分たちのメッセージ届けられますか。それは難しいです。大阪の場合、相手しなければならないのは270万人の市民です。800万の府民です。この人たちに声を届けなければならないときにどうするか。博物館と直接関

係ない人たちを頼りにするしかないだろうと。私たちの場合には博物館をよく利用している人たち、学校だとか、地域住民だとか、域外の住民も、観光・行楽でつかいます。で、実は僕らが案外力を入れているのが、アマチュアの人たちと、自然観察指導者の所です。何を言っているかという、この人たちは博物館から離れた所にも、自分たちで観覧会とかやっていますので、博物館から知識をちゃんと提供してあげれば、博物館からのメッセージがより広い範囲に届くわけですね。それで、公立の博物館だと下手をすともっと自分の地域の住民・学校の所に集中して、余計なところはやめちゃいなさい、みたいな意見も役所側からあるんですけど、それだと広い範囲に、博物館を超えて届いていかない。この人たち（地域住民）がもう一回、メッセージを伝える側に回ってくれればいいんですけど、それをやるためにはかなりの時間がある。でも、この人たちも、できればアマチュアだとか指導者の方に取り込んでいって、アマチュア・指導者と博物館とを含む全体のメッセージ発進力を上げていくということを努力したいと思うんです。

市民と一緒にやっていくための前提は、信頼です。博物館の使命を立てて、色々な実行をして、チェックをして、改善するみたいな PDCA サイクルみたいな話があるんですけど、それだけじゃなくて、私たちが頼りにされるためには、高い専門性を持って、ちゃんと計画立ててやっていますよー、っていうことを社会に対して見せて、そうすると、社会とか市民の側から参加してもらえ、あるいは支援してもらえ。一方通行で求めるだけではなく、自らを示してから聞く、社会との対話が必要なんです。

博物館経営論みたいなの中で最近よく言われることは、博物館の使命っていうことが大事ですということですが、先ほど大学の使命の話もありましたけど、それは社会との契約の話だし、それが上手くいっているかというのを評価して…、倫理の話は後でしますが、私たちが何をして、この博物館は何のためにやってるんだ。これは社会に示すんですけど、同時に博物館の中のスタッフが共通理解をするためのひとつの目安ですね。僕らがそれを提示することによって、ユーザーがちゃんと提供出来たり、対話出来たりすることになります。

もうひとつ、わかりにくいこととして、博物館の行動規範というものがあります。まあ倫理規定という風によく言います。要するに博物館が色んなことをやってるんですけど、これは正当な手続きによってやってるんですよ、私たちが研究の成果として示しているものは、ごまかしの捜査はしてませんよ、きちんとした手続きを踏んで、研究成果を皆さんに提供しているんですよ、と。それから自然史系博物館だと、標本というのがあります。これは残酷なんじゃないかということをする人もいます。そういう時に私たちは、どういう風な形で標本を入手しているか。要するに絶滅危惧種の標本を大量に取るということ、我々から考えてもやはりよくない、だとしたら、どういうガイドラインに則って、ちゃんとそれが社会に説明できる論理でもって標本を採取しているか。例えば獣の標本があったとして、僕らは交通事故死体を集めてるわけなんですけど、これはハンティングで殺して採集してるんじゃないんですよという、きちんと説明できる形で、それを示さない、博物館ていうのは信頼されていきません。最近、こういったものを大事にしています。

何が言いたいかっていうと、博物館が地域に対して色々なところに影響を与えていきたい、博物館が地域に対してメッセージを届けていきたいって言ったときに、本当に周り

に対してちゃんと連携をしていくためには、連携のために信頼される土台を作っとかなきゃいけないよ、ということで、倫理規定だとか信頼だとかっていうのが出てくるよっていう話をちょっとさせていただきました。

時間がないので少し飛ばさせていただきますが、大阪の博物館の場合には、使命というものもこうしたかたちで作って、資料の収集・保管、調査・教育・普及だとか、展示だとかっていう、博物館学の用語で言う博物館がやることっていうのを、私たちは何を目的にしているのか、っていう言葉で言い換えしていつているってことですね。私たちは自然の情報拠点として発展させていきますという形をしていますけれど、情報拠点っていうのは情報を集めて発信する、というよりは、情報を持っている人たちが集まる場所っていうことも含めてそういうことを言います。同時にスタンドアローンじゃなくて色々なところと連携してやっていきますよって話だとか、まあ経営の効率化って話も当然出てくる話なんですけども、経営の効率化の一番大事なものは、組織力を上げていくことです。

今の倫理規定だとか、博物館の周りにいる人たちと連携しますよって話は、実はそれ、学芸員だけじゃダメです。今日は学芸員養成の話なんですけど、学芸員だけの養成だけではだめです。さっきの使命だとかの話をするためには、総務とかの事務スタッフが、この組織はどういう目的のためにやっている所だから、どういう形で決算を書かなきゃダメだろうとか意識してもらわねえです。広報関係のスタッフとかも、役所のルールで広報すればいいんだってことじゃなくて、うちの博物館はどういうお客さんにどういうことを伝えなきゃいけないから、どういう広報の形をしよう、って考えてもらいたい。

学校対応のスタッフもそうですよね、学校に見学してもらって OK ではなくて、その先に何が作れるか。日常的にお客さんに接するフロアスタッフ、券売だとか案内だとか、警備員だとか、それからミュージアムショップとか。こういう人たちが博物館を理解しているかでもって、そこで例えばミュージアムショップだったら取り扱う商品が変わるわけです。博物館本体がこういう希少種の乱獲をやめませうって言った所で、ミュージアムショップの方で外来昆虫ガンガン売りますよーってな形でやっちゃうと、それは全然違う方向へ走ってるじゃないかという話になるわけです。博物館が何を目的にしてどういう理解を作りたいかということ、警備員さんまで含めて、子供に向かってどういう風に関わってくれるのかということがちゃんと理解してもらえると、うまくいくわけですよ。そういう建設的なディスカッションは、経営サイドだとか、学芸員だとかだけでなく、もっと言うとユーザーの声を入れて、バランスをとれる形で作れると、きちんと博物館は機能を上げていくわけなんです。組織の力も上がっていくわけなんです。

で、今ユーザーの声というのがありました。ユーザーの声っていうのは、利用者、それから将来の世代、今ちゃんと言えない子供たちの利益代表を誰がしてくれるのか。それから日常的には遠くから意見を言うだけなんですけど、学会、学術世界の人たちの意見をどう代表するか。この人達は、納税者だとか公務員だとか、いわゆる市長さんとか県知事さんとかと一緒に、みんな博物館の将来に対して責任を持っているステークホルダー、決定権保持者なんです。ここだけじゃないんです。利用者は、大事な将来を考える一員なんです。この世界、この人たちもちゃんとグループにしてもらって、さっき言ったユーザーの声を出してもらうこともすごく大事なんだと思っています。

そういうことで言うと、博物館学は学芸員だけのための講座だけではないはず。だ

から事務方のトップに博物館経営論を知ってもらわなきゃいけない。ところが、事務方のトップっていうのは、学芸員資格なんて要求されていませんから、全然このところの勉強ってないんですよ、チャンスが。役所の博物館の所を管轄する人たちにも、本当はちゃんとここを押さえて欲しい。外部評価する人も押さえて欲しい。だけど今、学芸員向けの資格ってなっちゃっているから、ここが伝わっていかない。博物館教育論っていうのは、広報の担当の人にも知っていてほしい。多分学校関係者は博物館教育っていうのはどういう風なスタンスでされているのかっていうのを学校の側でも、博物館を利用してみましょうっていうカリキュラムが始まっていますんで、博物館の側はどう考えてるんだろうっていうのを学ぶ機会が欲しいんですね。これ博物館はこう教えたいっていうのと、学校はこう利用したいっていうの、建設的な対話っていうのがまだあんまりないです。そこはちゃんと作らないといけない。

博物館資料保存論っていうのも、例えばボランティアの人たちが知っていると、資料の大事さとか、傷みやすい特質・性質とか色んなことを意識できる。そういう標本のことを知っていると、子供向けに色んな教育事業をするようなうちの場合には、教育スタッフっていう外部のメンバーと一緒にやるんですけど、こういったところでの理解はすごく進み、学芸員と色んな話ができる。例えば高校生向けなんかでも、高校生のための日っていうのを博物館に作ってやったんですけど、最近こういうことを言っています。高校生には、今回博物館で学んでね、じゃなくて、彼らには将来、一生の間で学んでほしいんですよ。だから学生の中にそのきっかけを作ってくれ、と。今日は1回目が良い。2回目3回目来るためのきっかけを探してくれっていう形で学生さんには言っています。今日お越しの大学生の皆さんも、この大学はいつか卒業します。何年後かも知らないし大学院行くのかも知らないけど、必ずいつか卒業します。でも博物館は一生使えます。関わりを持てば。そういうことってすごく大事ですし、博物館の方が学校の国語の授業のためにタンポポの貸し出しキットみたいなのを作るとして、これを国語の先生がどういう風に利用しようと思うかっていう、その対話と連携で作ってるわけですよ。そういうのも本当に連携の中で作っている。

うちの博物館は、すごく大事なところとして、友の会ってのを作ってます。友の会ってのは、今1700世帯近く。友の会を始めて60年。最初の内は数百世帯だったのが、1800世帯まで行って、今子供の数が減って1700世帯位になっちゃってるんですけど、この間の60年の間に、友の会を経由して育ってきた大阪のナチュラリストっていうのが、数万人を超えるでしょうね。すごい幅の、裾野の広い博物館のファン層っていうのを作ってるし、最近だったら博物館のオフィシャルのTwitterやFacebookのフォロワーなんかも何千人単位でいますから、そういう形で裾野の広い層に博物館はアプローチをかけている。そこで満足するんじゃなくて、その人たちの中から、周りに向かって語っていくリーダーを育てていくっていうのが、うちの博物館の友の会のやり方になります。

実はこの部分をNPOという形で組織化して、さっきの話で言ったユーザーの声というのの代表格に位置づけたということです。上の方の人たちは、その中で有償のスタッフをちゃんと雇うためにはどうやったらいいかというようなことまで考えます。ボランティア養成は、僕らは完全に普及教育だと思っています。で、ボランティアで「博物館の為に」やってもらうんじゃなくて、ボランティアをきっかけとして博物館で指導者養成をする

んだという形でやっています。こういう形で始めた人たちってのは実際リーダーになって、色んなことをバックヤードでやっています。一日 5,6 本イベントが並行で走っていることとかざらです。で、アマチュア研究者になって、自分で論文書いちゃうような人も出てくるし、観察会やったりする人も出てきます。そういう人たちがさっきの自然史フェスティバルみたいなところに出展すると、ますます広がっていくんですよね。また機会があったら、博物館の周りの NPO っていうのにも興味があったら是非探してみてください。

私たちは、ユーザーコミュニティがなぜ大事かと言うと、ユーザーが望む博物館を実現する回路なんだと。今、このご時世ですから、博物館をもっとこうして欲しいって役所に陳情したってそうそう変わらないですよ。もっとこうなったらいいのになって言ったら、じゃあどうすればいいですかねって一緒に考えることが、今はできるようになった。一緒に外部資金を獲得しに行ったり、一緒に新しいスタッフを作ったりとか、色々して、市民共同で、博物館こうなってほしいな一っていうのを自ら実現していく。諦めじゃくて自ら実現に走っていくことができる。そういうことをすることによって博物館の周りではどんどんどんどんコミュニティをよくすることができるし、こういうことをして博物館の周りがえらくにぎわってるなっていうのを見せていくと、影響を与えていくことができるんじゃないかって。で、ここにちゃんと影響を与えることができれば、実際博物館は変わりますよ。さっきはこの下の所、実際のエンドユーザーの所を変えていく、組織化していく。でもそれで活性化していくと、色んな人が振り向いてくれる可能性がある。今はここに中々手が届かないんだけど。

最後にちょっとだけ不都合な現状をお話しします。学芸員は、非正規が多いです。常勤の学芸員がこんだけになっちゃいました。もっと言うと、常勤無期雇用は若手が少ないです。さっき 1 万人の学芸員資格の中で 100 人しか就職してないって言ってましたけど、100 人の就職のかなりの部分が有期雇用、或いは非常勤です。直営の博物館が、若手じゃなくて OB 雇用で補ってる。外郭団体がやってる博物館が、若手を有期で雇ってる。だから直営の博物館は、公務員縮小の中でより難しくなっています。この非常勤有期雇用の学芸員を、いかにこっち常勤無期雇用にステップアップさせるか。すごく大事なことなんですけど、多様なスタッフが必要なんですけど、中々オンジョブトレーニングができない状態というようになってきます。そういう意味で言うと、大学側の養成講座っていうのを、博物館辺に関わってウォッチして、何が必要かをよく見て、現役若手学芸員のスキルアップに関与することっていうことをぜひ考えて欲しいです。

人材が流動化している世の中で必要なスタッフを採用して、ヘッドハントっていうか、もう今流に外資系みたいなことやれよっていう話もあるんですけど、例えば博物館マネジメントに精通している人材なんか、ほとんど世の中にいないんですよ。今から雇うとなると。やっぱりそういうことを考えると、今ある人材のスキルアップというのが益々重要なんですよ。

売り切りの Windows98 っていう OS が昔ありました。Windows98 だったら、次作るのは、XP です、7 ですって形で、新しい製品が出て行ったんですけど、最近の iPhone とか Android っていうのはどんどんどんどんバージョンアップしていきますよね。今あるものをバージョンアップできるような形にしていかないと中々難しいなって。博物館の、今いる学芸員とか今いるスタッフをバージョンアップする、完成品型学芸員養成からバ

ージョンアップ型の養成へってという形で考えて行くと、それは実は学芸員養成が地域の文化政策に直接関与する方向だったりとか、文化都市政策という風に関与する形になっていくんです。だからそういうような現実の博物館と、現実の大学がこうして対話を続けていく必要がやっぱりあるんじゃないかな、と思います。

長々話しました。多様な機能を博物館は本当に持っていますんで、スタンドアローンじゃなくて連携でやりましょう。で、学芸員を機能アップさせることがすごく大事なんで、送り出して終わりの養成課程から、ともに現在の博物館のあり方を探る養成課程となることを願って、話を終わらせていただきます、どうもありがとうございました。(拍手)

山田

どうも佐久間さん、刺激的なご講演をありがとうございました。もう一度拍手をお願い致します。(拍手)

それではここで休憩を取らせていただきます。時間の都合で、7分くらいとさせていただきます。なお、本日のシンポジウム終了後 16 時から、本学の「ばせお」というレストランで、懇親会を開催いたします。どなたでも参加可能です。佐久間さんやパネラーの方ともう少しお話をしたいと思われる方、またご都合がつく方は受付まで御声掛けください。それでは休憩に入らせていただきます。よろしく願いいたします。

【パネルディスカッション】

山田

ここからはパネルディスカッションに入らせていただきます。パネラーは、基調講演をいただきました佐久間様を含めて、4名の方に前にお座りいただいております。私の方から紹介をさせていただきます。

皆様から向かって左から佐久間様ですね、それから、海の博物館館長及び三重大学客員教授の石原義剛様です。(拍手)

次に、皇学館大学文学部教授及び佐川記念神道博物館館長の岡野友彦様です。(拍手)

そして、三重県総合博物館学芸員の中村千恵様です。(拍手)



今は「様」でご紹介させていただきましたが、ここからざっくばらんなディスカッションにしていきたいと思っておりますので、「さん」付で進めさせていただきたいと思っております。パネルディスカッションの進行の仕方ですが、初めに3人のパネラーの方から、それぞれ10分弱ずつ基調講演に対するコメントをいただきます。そしてそれらのコメントに対する応答を、佐久間さんよりしていただきます。その後は本日のテーマに関わって、あるいは特に今回の基調講演の内容や、パネラーの方々のご発言に対しての、会場の皆様からのご質問やご意見をお受けしながら、それに応答するような形で進めさせていただきたいと思っております。その討論の時間は、パネラーの方のご発言の後になるわけですが、短くて申し訳ありませんが、20分くらいになってしまうかもしれません。ご了解いただきたいと思っております。そして最後にパネラーお一人お一人からコメントをして頂いて終わっていくと、そういうような展開を考えております。ご了解いただきたいと思っております。

それではまず、石原さんからコメントをいただきたいと思っております。それでは石原さん、よろしくお願いいたします。

石原

ご紹介いただきました石原でございます。私は海の博物館という博物館を1971年に立ち上げまして、現在45年をちょっと過ぎたところでございますが、私自身、佐久間さんの色んなお話を聞いていて、ほとんど全部非常に明快にお話をいただいたので、あまり付け足すということができないかと思えます。司会者をちょっと裏切ることになるかもしれませんが、勝手なことを少しお話させていただこうと思えます。

私はマスコミの世界に10年ばかりおりまして、それをやめて1971年に博物館を作った人間で、それまで博物館というのには、縁もゆかりもない仕事をしておりまして、博物館を一から作ってたたき上げた皆さんと、考え方が少々違うかもわからない。ただ博物館を立ち上げるにあたって、とにかく一番大切なのは資料だという認識だけは持っておりまして、懸命に資料集めを続けておりました。最初、ちょうど万博のあった次の年に作ったものですから、博物館という名前を付けて華やかにスタートすればお客さんはいっぱいくるななんて安易な始め方でやっていたら、開館したらお客さんは殆どおいでにならないという惨めな開館の時代でございました。従って、逆に資料をもう一遍集め直そうと、徹底的にやりだしたわけです。そうしましたら1977年に、大阪万国博覧会の跡地に、国立の民俗学博物館ができあがりました。おいでになった方もいるだろうし、ならない方はぜひ一度行っていただきたいと思うんですが、この初代館長になられた梅棹忠夫先生という方が、当時博物館論を展開なされたんですね。今本屋にいてもほとんど置いてないんですが、中公新書の中に論文をたくさん書かれた。これは、僕は日本の博物館の戦後の革命だと思ってるんですけども、その中のひとつに、“博物館は、博情館である”というメッセージがあったんですね。博”物”はモノです、“情”は情けという字ですね、モノと情報の建物という意味ですね。博”情”館。

もうひとつ、“博物館はメディアである”、こういう発言をされています。博物館はメディアだという本も出されています。要するに博物館はその持っている情報を外へ打ち出していかなければならない。私のところの博物館は、多少辺鄙な所にあるせいもあって、一番多かった年で高々一年間に入ってくださったのは6万人です。その後結構努力して、3万人程度のお客様は持続して入ってます。ですけども、3万人っていうのはほんのわずかな入館者ですね。この入館者の皆様に、一生懸命なメッセージを差し上げて、それは大きな限界があるわけでありまして。だから、多分梅棹忠夫さんはおっしゃったと思うんです。博物館というのは、館という場所で情報を持っているだけで、そこへお客さんに来ていただいて対応するというだけではだめなんです。館全体で情報を如何にたくさん外へメッセージを出していくかという、そここのところが根本的なんだと言うところに、やっとなんとか、気付いたわけです。そして今、佐久間さんがおっしゃったことは、そのことを具体的にどう展開するかというお話だったんだろうと、こう思います。

ちょっと元へ戻ると、博物館の仕事っていうのは、さっきパネルに何回か出てきたように、資料の収集、保存、展示、そして今までは“教育普及”という言葉で4つの柱を立ててきたわけですね。資料を調査して集めて、そしてきちんと保存して、それを館の中で展示展開する。更にそれを教育普及という形で、もう少し別の方法で情報伝達すると、こういう風に考えている。だから私は、この教育普及というのをもっとこれから大切にしながら、いかに展開できるか、その後色々なことを、今に至るまでやっています。今の言葉で言う

体験プログラムだとか、海の観察だとか何とかって様々な体験メニューとか、外へ出す情報、メッセージというものを作る努力をしておりますし、これからの博物館はその部分に対して、非常に重要な役割を果たして行かなければならないというふうに思うわけであります。

そこで果たす学芸員の役割は何かというと、今まで一時期、博物館の初期の時代、というか30年くらい前にはですね、博物館の学芸員は”雑”芸員だという、雑な仕事をする人だという、一つの自嘲的な呼び方で語られた時代がありました。ですが、私は逆に言うと積極的な雑芸員がこれからの博物館を背負っていく、そういうことではないだろうか。逆に言うと、さっきのお話の中にも出てきたように、博物館学芸員、研究員、っていうのは、専門職の、専門分野の研究員ではないわけでありまして、様々な、博物館における活動というものをすべてやっていかなければいけない、そのときにひとつの分野の専門家になったら、これは何もやれて行かない、今ある分野の博物館では、多少博物館の学芸員が研究的に成り下がっているっていうのがあって、これは非常に危険だなと思っている所があります。一時期、これは民俗博物館の事で言いますと民俗博物館が1970年代の中ごろに非常に力を持った時代がありまして、日本中に、優秀な学芸員が育ちました。ところが、その民俗学分野の優秀な学芸員は、みんな大学の先生になっちゃった。それで残された博物館は非常に苦勞をした、そういう現状さえあるわけでありまして。これはもう一つ別の、博物館の学芸員に対する待遇とか、その他別の局面もありますが、しかしそういうふうにして博物館が、変わってきたということだと思います。今トータルして見てみると、博物館は冬の時代に入っておりますが、ここでいかに博物館というものをもう一遍立て直していくか、博物館を新しい分野の中で作り直していくかっていうのが大変重要なことで、さっき佐久間さんのおっしゃった、博物館は気付きの機会を作る場所だ、そこにきっと尽きていくんだろうと思います。たくさんの研究したい人がいるけども、やはり博物館っていうのは気付きの場所として動機付けられるか、ということになっていくんだろうと思います。実際には最近フィールドから非常に遠くなっておりますんで、たくさんの方をいかに近づけていくかということが大切だろうと思います。私は少なくとも、自分の博物館は町の情報センターでありたいと考えておりますし、それから博物館と観光というものは、これから新しい博物館のあり方として重要性を持つんだろうと思って活動を展開しようとしております。

時間のようなので、ここまでにしておきます。

山田

ありがとうございます。では岡野さん、宜しくお願いします。

岡野

失礼します。ただ今ご紹介いただきました岡野と申します。皇學館大学附属の佐川記念神道博物館という博物館の館長をしております。佐川記念というのは佐川急便さんからのご寄付でできた建物ということで佐川記念という名称がついており、また、皇學館大学は國學院大學と日本でただ2つの神職養成の大学でございますので、神道の博物館。神道博物館と名の付くのは日本でうちだけでございます。その館長をしているということで

この場に座らせていただいておりますわけですが、その前にちょっと簡単な自己紹介を申します。私、大学院を出ました後、東京都の江戸東京博物館という両国駅前の博物館で、学芸員を7年ほどやっておりました。その後に皇學館大学に参りまして、皇學館でも学芸員養成課程の授業も若干持たせていただき、7年ほど前から神道博物館長をしております。そういうことで、学芸員をやった経験と、大学で学芸員課程の教育を担当させていただいた経験と、そして神道博物館長という立場と、この3つの立場から今日はお話をさせて頂こうと思っております。

今日の佐久間さんのお話、大変私も勉強になって、いろいろなことを申し上げたいのですが、10分しかないということで、どのようにお話ししようか考えたのですが、まず佐久間さんのお話で重要なことが2つあると思います。まず1つは、博物館は展覧会を開いて終わりじゃないと。展覧会に行って、そこからフィールドに行きたくなること、この言葉は大変重要なキーワードになると思うのです。フィールドに行く来館者を増やす、来館者をフィールドへとつないでいく、そしてユーザーを育てる。その育ったユーザー組織の中からサポーター組織が充実していく。そしてそのサポーター組織が充実した中から博物館が更に成長していくのだと。こういう良いサイクルができていくということが、大事なのだというお話であったかと思えます。

この、フィールドに行きたくなるということ、私はすごく大事なことだと思っております。今、石原さんの方からも、博物館は資料が命だというお話がございましたが、大変逆説的な話になるのですが、私は博物館にモノが入ってしまった瞬間に、実はそのモノは死んでしまうのではないかと思っております。江戸博にいたときに、江戸博は何のコレクションもないところからスタートしましたが、非常にいやらしい発言ですがお金だけあったので、東京都が博物館を作るために日本中の文化財を買い集めた。ちょうどバブル期でしたので、これで古美術品の物価が異様に上がったとか、東京の文化財は全部江戸博に集まってしまわないかというような批判を受けたことがありました。

確かに、マーケットに既に出ているものを買うことについては、私はあまり罪悪感がなかったのですが、後々、いや江戸博にいた頃もですけど、地方に調査に行くと、本来この家に伝わってこそ意味のある古文書が、どうもこれは高く売れるらしいと聞くと売りに出してしまうのです。あるいは今、神道博物館におりまして、神社関係の資料の調査も色々しておりますが、狛犬が売れるらしいと聞くと、狛犬が盗まれるのです。日本のお寺も神社も、地方は今少子化が問題で、無住の寺、あるいは何社も掛け持ちしていらっしゃるようなお社が、たくさんあります。仏像が盗まれる、狛犬が盗まれる、これは実は博物館が買うからいけないのではないかと。買う人がいるからそういうのを売る人がいる、売る人がいるから盗む人がいるのではないかと、こうして博物館は、実は文化財を滅亡に追いやっているのではないかと。こういう問題があります。

海の博物館が栄えて海が減んでしまっただけでは意味がないわけで、神道博物館が栄えて日本の神社界が減んでしまっただけでは、これは全く意味がありません。今日は自然史のお話ということで、フィールドに行くためのプラットフォームの役割を博物館が果たすべきだというお話がございましたが、これは人文系に関しても同じことが言えるだろう。日本中の神社資料を神道博物館に集めてしまったら良いかということとそんなことはなくて、そこに集めてしまったらそれはもう死んだ資料です。神社の資料は神社でお祀りに使われている

からこそ初めて意味がある、生きている資料、ということになるわけで、その資料の生きている状態に来館者を繋いでいく、そういう繋ぐ存在にならなければ、神道博物館の存在意義はないのではないかと、今日のお話を聞いて考えたということが1つ目でございます。

もう1つ、今日のお話を聞いて考えたことに、佐久間さんのご発言の中に、ディープな世界とか、マニアックという言葉がございました。博物館というのは本来マニアックな所なのですね。博物館の周りにどれだけキノコに詳しい人がいるかというお話がございましたが、キノコマニアがいたり、虫マニアがいたり、あるいは恐竜マニアがいたり、F1のマニアがいたり、そういうことで博物館は支えられていると言えます。さて、それでは神社マニアや古文書マニア、そういった人が一体どれだけいるだろう、そういうふうに見えるわけです。お隣に中村さんがいらっしゃるの、後でお話があるかもしれませんが、今、三重県総合博物館 MieMu で「明治の日本と三重」という、これまた本当にマニアックな、ものすごく良い展覧会が開かれております。しかし、マニアックな展覧会はマニアックであるほど、マニアには良いのですが、マニアが薄い分野は来館者が伸びないという大きな問題を抱えてしまうわけです。いかに来館者を増やすかということを考えてときに、マニアを増やせば良いわけですが、マニアはそう簡単には増えません。

そのためには、やっぱりマニア以外にも分かる言語で説明できること、之が大切なのだろうと思うわけです。例えば神道博物館が神社界や、神社について詳しく知っている人たちにだけわかる言語で話していたのではだめなわけで、神社なんか一度も行ったことのない、むしろ神様と仏様の違いすら判らない、そういう人にわかりやすく説明できる、そういう場所にしていかなければならないだろう。そういう意味で、今日の佐久間さんのお話の中に、身内の事務職員にきちんと説明できる、何も専門性を持たない事務職員でも共有できる、そういう博物館にしていくということ、これが大変勉強になったということでございます。そういった博物館づくりを私どももしていかなければならないなど、そういうふうを考えています。この2つを、今日は勉強させていただきました。以上でございます。

山田

ありがとうございました。それでは中村さん、よろしくお願いします。

中村

よろしくお願ひいたします。岡野先生からご紹介がありましたので、明治の公文書の話から少し踏み込んでいきたいと思うんですけども、明治期の公文書ですとか、歴史の史料という、先ほど仰っていただいたように結構マニアックな方が見えるというそういう傾向はあるんですけども、実はこういった公文書ですとか歴史の史料は、一部の方が熱心に研究されるためだけに存在しているのではないんですね。公文書というのは行政機関で作られた文書です。そういったものは、実は私たちの生活に密接に関わっていて、そういうことがわかる展覧会になっているんですね。ですので、この公文書というのはマニアックな世界に見えつつ、実は私たちの生活の基盤になっている、とても身近なものなんです。そう言った所から、さっき佐久間さんからもお話があったんですが、博物館学とい

うこの耳慣れない学問ですけども、これは博物館の学芸員の為だけのものではないんじゃないかというお話がありました。こちら公文書と同様に、博物館は誰もが使える、誰にとっても実は身近な存在なんだというふうに私は思っています。そう言った所から、この博物館の考え方、博物館がどういう存在なのか、地域にどういうふうに役に立つのか、どういうふうにみんなに関わって行って、この地域を盛り上げるときにどうやって使っていったらいいのか、そういうことを考えるというのは、学芸員だけに限らず、私たちの博物館にもミュージアムパートナーという活動グループがありますけども、そういったミュージアムパートナーの方々ですとか、岡野さんもおっしゃっていたような、事務職員の方、そういった方にも知っていただきたいと思っております。

そういった意味で、博物館学というのは、博物館というのがどういうところなのか、どういうふうに役に立つのか、ということをして社会の為に研究する学問なんですけども、こういったことを学んでくれる人が増えるというのは非常にいい機会だと思います。最初に話がありましたけども、今大学で学芸員養成課程に入って、学芸員資格を持って卒業される方が毎年約 1 万人、という話がありました。そう言った所はある意味でチャンスでもあると思うんですね。先ほども佐久間さんからお話がありましたが、博物館のマネジメントですとか事務に関わるところに、中々そういった資格要件が入っていないという面もありますが、実は本当に必要な資格要件なのではないかと思えます。この学芸員養成課程を経て、そういった知識を持つ人が、博物館のマネジメントに関わっていける、そういう仕組みを作っていくことですか、そういったことが今後とても必要なのではないかなというふうに感じました。

また、博物館の学芸員に学部から就職できるのは、年間 100 人くらい、しかも非正規が多いという話がありましたけども、博物館に関わる仕事は学芸員だけに限りません。例えば博物館の展示を作る会社ですとか、行政機関に入って事務職員から博物館に関わる、文化行政に関わるといったあり方もあります。そういったことを考えるときに、こうした博物館学、博物館学芸員を養成する大学では、博物館がどう言った所なのかということをして特に理解できる、それを深める養成課程にしていきたいな、というふうに思っています。例えば資料の取扱いですとか、そういうテクニクの部分については、現場に入ってからでも習熟することはできます。しかし、博物館がどういうところなのか、地域とのかかわりでどういうふうに地域を盛り上げていく存在になったらいいのかということをしてじっくり学べる期間は、特に大学が重要になってくるのではないかなと思っております。そういった意味で、まず大学では博物館のファンを増やすための養成課程ではなく、博物館への理解を深める、その後、佐久間さんから”完成品型からバージョンアップ型の学芸員へ”というお話がありましたけども、徐々に大学の中でもそういった学芸員課程、輩出した学芸員を更にレベルアップさせていくようなプログラムを考えていただけると良いのではないかなと、そういうふうに思いました。

現在、学芸員の研修というのも努力義務になっていますし、文化庁とかそういった所でエドゥケーター研修やミュージアムマネジメントの研修が組まれていますけども、そこで大学との関わりというのがまだあまりないと思えます。大学で育っていった養成課程の学生たち、現場に出て行った過去の学生たち、そういった所がまた大学の中で再び育っていくと言った内容はまだないと思えますので、そういったことを大学の中でバージョンア

ップ型へというときにどのように考えられるのかというところ、また色々ご意見を聞ければと思います。

また今回は、大学の養成課程ということで、市民から博物館の学芸員は、信頼されることがコミュニティを築くとか、そういったときにとても大切になってきます。そういった学芸員を育てるために、養成課程の中で博物館ができること、大学側ができること、お互いにそれぞれあるのではないかと、今回の話を聞いて感じました。そのあたりもまた、大学の立場ですとか、博物館の現場の立場から色々お話を伺えればと思います。以上です。

山田

はい、どうもありがとうございました。3人のパネラーの方から佐久間さんの基調講演に対しての、共感を込めた指摘していただいたり、最後は中村さんから学芸員養成課程のあり方も含めてご発言いただいたと思います。ではここで、佐久間さんから今のパネラーのご発言を受けて、応答していただくということで、よろしく願いいたします。

佐久間

はい、何か過分にうまくまとめていただいてありがとうございますという感じなんですけども、まず最初に石原さん、梅棹先生の博情館の話、メディアの話、本当に大事だと思います。今インターネットが当たり前の時代になって、博物館もそのメディアの中に入ってるわけなんですけども、この中で博物館がオリジナルコンテンツを作っている場所だっというの、すごく大事なことなんだと思うんですよ。町の情報って、市役所とかもたくさん出してますし、図書館にもあります。だけど自分たちで史料から読み解いたこの町の姿・歴史っていうことを積極的に発信していける場所って、博物館くらいしかないですよ。だから、本当にその地域の歴史を調べようと思ったら、博物館にしか情報がないことがいくらかもあります。そういう意味では、コンテンツ・プロバイダーだということ、コンテンツメーカーだということが、博物館のすごく大事な特性なんじゃないかと思います。そのことを考えると、先ほど雑芸員という話もありましたけども、私は博物館の学芸員が研究者であることは、重要なことだと思うんですよ。それは地域に向かって、地域に信頼されるための研究者であるってことです。さっき言ったマニアックな人たちって、本当にその道の猛者ですよ、その人たちが、この博物館はダメだと言ってっちゃうことは、すごく簡単なことなんです。だけどそうじゃなくって、あそこの博物館と一緒にやってくれるよっていうふうに関心してもらえるかどうかは、ちゃんと市民に向けてる研究者であるか、あと本当に自分がそれを面白がる姿を持っているか、途中でも言いましたけども、自分が研究していることのここが面白いんだって魅力が発信できるかどうか、論文を何本書いているかというよりは、研究に対する動機付けっていうのをちゃんと持っているかどうかっていうのは、すごく大事な所かなというふうにおもいました。

そこからちょっと繋がって、養成課程の話に行くんですけど、僕は博物館に入って、一番最初にやっぱり、ある意味で客に育てられたんだと思います。吉本の芸人と一緒です。芸人と学芸員を一緒にするなって話になるかもしれませんが、要するにちゃんと話をし、

話が伝わってるな一とか、ここ難しいよって、今日の話は面白かったけどあそこが難しかったよねって、お客さんの声でもって鍛えられるところはありますよね。そうすると、これ私自身が面白いと思っていることをみんなが面白いと言ってくれるのであれば、私は背中を押されている気になるわけですよね。そういうところっていうのが、オーディエンスを引っ張っていけるところかなと思いますし。博物館が養成課程のみなさんに提供できることっていうのは、その体験をみんなに伝えることができる場所かもしれないですね。一般の方に「魅力」を伝えるっていうのが、先ほどマニアックっていうものが、どうマニア以外に説明できていくのかというのがありましたけど、学会で話をするのと全然違う話になりますから、たぶん結構大変でしょう。そういったことを色んな所で研究者の卵の人たちにも体験してほしいなと思います。

生きている資料につながる博物館っていうのは、私たちも本当に同感ですし、博物館がマーケットを破壊しているんじゃないかとか、悪いことに繋がっているんじゃないかという誤解を避けるために、先ほど上手く表現しきれませんでしたけど、博物館の行動規範倫理規定みたいなものが、これからますます重要になってくるんだろうなと思います。ちょっと話の順番が前後しましたけれども。

山田

ありがとうございます。それでは、これまでの基調講演や今のパネラーの方々のご発言を受けて、会場の皆様からご質問をいただきたいと思います。早下手が挙がっていますのでそれではお願いいたします。

山田（桑名）

桑名市から来ました山田です。佐久間先生にお伺いしたいんですが、博物館の現状で、非正規雇用の学芸員が半数を超えていると、おっしゃいましたよね。ではなぜそうなるのかと、またそれが増えることによって、博物館の質の低下が心配されるのか、どういう弊害があるのかそれをお伺いしたいです。

佐久間

はい。非正規雇用が増えているというのは単純に言って公務員の定数削減というのが非常に大きいですね、公立の博物館の場合は。私立の場合もやはり親会社がどうしても利益追求にシフトしていかなきゃいけなくなると、非正規化が進んでいくというのがありますね。そうすると一番問題なのは、中長期的な、資料に関する情報の伝達ですよね。例えば非正規の若い人が入るとしたら、それは逆に一時的には活性化する部分があるんですよ、若い人たちがたくさんいるから。ただ、その人たちが3年サイクルもしくは5年サイクルでやめていかなければいけなくなった時に、この資料はどこからどういう経緯で入ってきたものかということが、ドキュメントに書けるものは伝わります、だけどドキュメントに書けない、エピソード的な話はどんどんどんどん抜け落ちちゃいますよね。それだけじゃなくて、むしろ大事なものは人とのつながりです。これ、特に文化系の場合は深刻なんですけど、お寺さんの前の住職さんの時代からお世話になっておりますという、顔が繋がる信頼関係というのは特に歴史文化財関係にはすごく重要なんですよ。私たち

でも、アマチュアの人たちと、それこそ 60、70 代のアマチュアの人から”俺が死んだあとは俺の標本頼むよ”なんて言われるわけですよね。その約束が繋げるかというところにかかわってきますよね。そういった地域と繋がる、コミュニティと長く繋がると言った意味では、長く勤めていただくべき職種なんじゃないかなあと言うふうに思います。よろしいでしょうか。

山田（桑名）

ありがとうございます。

山田

他に如何でしょうか、ご質問や意見をお願いしたいんですが。…はいどうぞ。

成岡

三重大の生物資源学部の学芸員養成課程委員会の成岡と申します。佐久間先生以外にもどなたか、もしかしたら布谷館長の方がいいかもしれないんですけども、今博物館と言っても、我々学芸員養成課程では、博物館法に基づくナントカって言いながら、相当施設という言い方をしたりもします。例えば世界的に見れば、大英博物館と違って、先ほど国立博物館、また地域に行きますと県立、公立博物館、で最後のカテゴリに株式会社ナントカっていうのがある。そうすると我々は一体どう扱えばいいのか、認識すればいいのか、学生にどう紹介すればいいのかって思うんですね。その施設に少なくとも一人以上、二人くらい学芸員さんがいらっしゃるかどうかで、まずじゃあ館園実習に行ってきたさいと言うんですね。ところがこの間布谷館長に教えていただいたんですが、三重県だけでも 100 を超える博物館相当施設があるんですよと、あーそんなにあるんですかと終わっちゃったんですけど、是非ですね、先ほど佐久間先生からもありましたがネットワークをお願いしたい。この情報はどこに行けばわかるのか、というネットワークも教えていただきたいんです。

もうひとつはですね、今日は皇學館の先生もいらしてらるんですが、大学の研究室と博物館のバックヤードとの交流をどう進めていくかという、そのあたりのノウハウが、もし佐久間先生にございましたら教えていただきたいんですが。大学の方は揉み手で博物館を狙ってます。学生を送り込みたいと思っています。それから学芸員さんにも来ていただいて、色々な交流をしていただきたいと思っています。そういうホットな時でありますので、賃金の話とかあるいは学芸員はつらいなとかそういう話よりも、夢の広がるような将来展望を言っていただければありがたいんですが、そのあたり、お願いしたいです。

佐久間

とりあえずは先攻で佐久間の方からさせていただきますが、博物館のネットワークはそれぞれの都道府県で博物館協会みたいなのがあったりします。大阪は実はないんですけど、逆にしぼりが無いということで自然史系で言うと、私たちは西日本の自然史系博物館ネットワークっていうものを作っています。それは、学芸員たちが入ってくる同業団体みたいな形でやってるわけですけども、そういうところに来ると、どこの博物館はどうい

う状況で実習をやってみてみたいなのは、内輪では見えてくる。ただ、博物館実習に学生を送り込むっていう場合は、やはり送り込む側からどういった形で学生教育をしていて、おたくの博物館はどういうことが体験できるから送り込みたいみたいなことがないと、こちらとしても厳しいということです。つまり大学とそれぞれの博物館の間のネットワーク、信頼関係みたいなものがあるかどうかですよね。同じことは卒業研究で置き換えてみても言えると思うんですけど、卒業研究の学生をいきなり送り込むからって言われても、送り込まれた側はどうしたらいいかわからないですよ。それと同じようなことだと思っていただければいいんだと思います。

なかなか博物館ネットワークでその仲介は難しい。大学も多様なので。博物館と大学が組むことによって一番狙えるのは地域活性化、あるいは地域おこしをこういうスキームでやろうよ、みたいなことをちゃんと絵を描けばできるんだらうと思います。地域で文化おこしをしたってなったときに、そのリソースとなるストーリーはそこにありますよねというような形でやると、行政の中で埋もれていた博物館という存在が浮かび上がってくることは当然あるでしょう。そこに外部資金、民間資金を含めてどういった形でつぎ込めるでしょうか、あるいはこのモデルケースっていうのをもっと全国モデルに発信できますよねって。もしかしたら、その辺は大学の方がよくされてるかもしれません。そういった形で積極的に地域の価値を発掘していくっていうのは、Win-Winになるモデルとしてアリだらうと思います。

ただ、現状で博物館は、ネガティブな話を言えば余ってるリソースは少ないです。資金的・時間的余裕といったリソースは今博物館側にすごく少ないと思うので、それを乗り越えてでも大学と組みたいと思うような、うまくベネフィットになる部分をどうやってきちっと作っていくかっていうのが、その設計をうまくやらないと、待ってても来ないかなというのはすごく思うんです。とりあえずそんなところです。



山田

どうもありがとうございます。この問題は、実はパネラーの皆さんにお聞きしたいくらいのお話なんですけど、ただちょっと時間的なこともありますので他のご意見、ご質問を受け

た方がいいかと思うので…。はい、お願いいたします。

岡田

皇学館大学の神道博物館の岡田でございます。中村さんにちょっとお聞きしたいのですが、先ほど「モノの取扱いとかはそれぞれ館の方ですとか色々な方によって、学芸員になってから訓練すればいい」とそういうようなことをお聞きし、「それよりも博物館そのものの色々な事柄について理解を深めるような学芸員養成課程であることが重要な点ではないか」というようなお話だったかと思うのですが、実は博物館学芸員課程で博物館学を教えている教員が、博物館学の専門家というのはほとんどいないというのが現状であろうかと思えます。私も実は博物館学が専門ではございません。神道史が専門でございます。その中で学生に博物館とは何かというのを教える場合には、まさしく概論的なことですか、あるいは博物館研究等の論文によって勉強したことを伝える、その程度です。それが日本の博物館学芸員養成の大きな問題点であることも重々承知しておりますが、博物館学を専攻されている先生と、いわゆる現場の学芸員として長年やってきた者が学芸員課程の教員として教える場合、それぞれ大きな思想の違いがそこに歴然と現れてくるわけです。

博物館学というのは教育学の分野に位置づけられていますので、我々からしますといわゆる教育原理とかそっちの方の方法論で博物館というものを考え、あるいは分析していくと、そういう学問と考えてしまうのですけども、しかし実際に博物館に就職する学生は、現場に行ったらすぐ次の日から、例えば何人もの学芸員を擁する博物館でしたら何人もの先輩について訓練を受けながら学んでいくことはできるのですが、一人しかいない所で、その人が何らかの都合で退職されるから、急遽学芸員を募集して一人位置付けた。ところがその学芸員は、博物館のことには詳しいが、現場の事には、モノの取り扱いあるいは文書、そんなものがほとんどわからない。と言った場合に、博物館というものが機能しなくなる恐れも実はあるかと思うのですね。

特に、弱小県と言ったら三重県に失礼なのですが、いわゆる都市的な博物館の形態を持っていない、館長＝学芸員一人しかいないとか、あるいは館長と学芸員しかいないとか、館長は事務職で学芸員は一人、それも嘱託である、というような現状を考えた場合、これからの博物館あるいは博物館の養成というものについて、どのように考えて行ったらいいのか、これは中村先生にお聞きするのは酷かみしれず、申し訳ないと思うのですが、布谷館長も今日おいでですし、私はこれが学芸員課程の一番のネックではないかと。学芸員をたくさん擁している館もあれば、一人しかいない、ゼロに近い館もある。そのハンディをどう解決して、よりスキルアップした博物館を作りあげていくか。このあたりが一番気がかりなことかと思っておりますので、ちょっとその点ご意見いただければと思います。

山田

この点につきましては、いわば博物館学のあり方というか、実習も含めてですね、それを博物館側から応答するというので、中村さんと、石原さんにもご発言いただけないかなと思います。まず中村さんお願いします。

中村

はい、ご質問ありがとうございました。今仰っていただいたように、確かに博物館学を専門にしている大学の教員の方が圧倒的に少ないという現状はまずあります。ですので、まず博物館学自体を教えられないじゃないかというところは、この学芸員養成課程の大きな課題であるというのは、私も認識は同じです。それで、仰って頂いたように、博物館と一口に言っても、小さな館から県立、あるいは国立まで、色々な館の形態ですとか、運営状況によって、求める人物像は様々だと思います。そういったときに、即技術が必要じゃないかとおっしゃるところも理解はできます。勿論技術はあるに越したことはないし、習熟している方が雇用する側も安心であるというのがまずあると思います。ただ、さっき言っていた、学芸員としての倫理規定、行動規範ということ考えたときに、技術があつてモノの取扱いができるというだけではやはり十分ではないと思うんですね。そういったときに、地域の博物館であればその地域のためにその資料をどう取り扱って地域・利用者の皆さんのために還元していくのか。そういった考えができるような学芸員が現場に入っていないか、博物館のシステム自体が壊れていくという危機にあるのではないかなど私は考えておりますので、まあちょっと机上の空論ではないかというご指摘もあるかと思いますが、博物館学の理論ですとか、博物館そのものに対する理解を深めることが重要であると、あくまで私は考えております。

山田

石原さんお願いします。

石原

大変困った質問を受けました。今、私の所は3人学芸員がいて、1人は学芸員を大学で課程として受けてきたんですが、今まで過去ずっと学芸員が何人もいましたが、ほとんど10年間学芸員補をすれば学芸員になれるという、そういうところから育った連中が多くてですね、基本的には学芸員課程から来たという人は、やっと1人いるという程度です。

ただやはり、今の中村さんのお話と通ずる所があると思いますが、基本的にはその博物館自身がいかにちゃんと対応できるかということと、それからその学芸員が本当に博物館学芸員になりたいと思ってやっているかどうかの話だろうと思います。

ただ一つ、僕たちが大変困っているのは技術の問題です。保存科学・資料の保存技術と言うことに関しては全く勉強できない、そういう機会がないわけです。多分フランスは制度的に分かれてるんですね。フランスのキュレーターは、保存科学をやっている人と、学芸員とが分かれている。ああいうシステムというのは、日本はちゃんと考え直すべきじゃないか、と。今日の大学では、それが少し出てきたように思います。

山田

はい、ありがとうございます。実はもう時間が過ぎまして、ここでご意見ご質問ある方どのくらいいらっしゃいますか。お一人。では今のお一人の方にご発言頂いて、この会場の応答は終わらせていただきます。それではお願いします。

後藤

どうもありがとうございます、朝日町の歴史博物館の館長の後藤でございます。私は事務職で今まで博物館とは全く縁がない生活をしておりまして、それこそ朝日町の企画課とかそういうところをずっと歴任してきました。ですので、まあ博物館は廃止したらええやんかという持論者でした。ただなぜか管理職になって教育委員会文化課長・図書館・博物館長を兼務するということになって、それで思ったんですけど、来てみたらロビーが寂しい。それでロビーに情報発信基地と言うことでパンフレット並べてみたり、ハローワーク他情報提供ができるものを並べてみたり。手狭でパンフレットが乱雑になっているもので、全情報がウチで取れるようにしようとしたり。色々やってくれと言うと学芸員さんは非常に抵抗する。忙しいと。

忙しいと言うことで町長に言って、何十年ぶりに学芸員を一人採りました。それで正規3人と嘱託の4人なんですけど、うちは非常に優秀な方多いんですが、勉強も展示もよくできるけど、そこまでやる必要ないと言われるので私に説明してくれと言った。私が良いものだと思ったら私が説明すると。朝日町の小学校は三重県下で最大なんですけど、そこからたくさん来るので、5分でいいから説明してと行ってどンドン話をしたり、展示会があったら私が説明したりします。今日はスーツですけど普段は綿のパンツとシャツで館長らしくないです。今、議員さんから来場者を年間1万人に増やす使命を受けてます。今まで多くて6000人今年で5000人いったかと言う位。学芸員さん、たくさんいて勉強はできるのにトークはできるか。自分が良いと思わなければ相手を説得できないから。悪徳商法と一緒にすよね。佐久間先生がおっしゃったような地域のファンができないから、それがうちの課題かなと思ってます。

展示会やったら目標を立てようと言うことで、うちなら一回で1000人来てくれたらいいかなとか。現行の学芸員さんに関しては既存のシステムを壊してと。中々壊してくれないので。今年入った学芸員さんには、好きなこと言いな、予算とって来るからと。つい最近やったのは地域創生事業で予算を取って、コンテンツを作ると言うことで、うちは東海道が通ってますから、東海道の交流人口を増やすと言うことで、明日から議会へ入って1600万取ってきました。なので、できるだけ学芸員さんには既存のシステムを壊しながら夢を追いかけてほしい。

山田

ありがとうございました。それでは時間が超過しているんですが、最後にパネラーの方に一言ずつご発言頂いて、終わっていきたくと思います。では中村さんからお願いします。

中村

みなさん今日は長時間に渡ってお付き合いいただき、ありがとうございました。学芸員は博物館を動かしている人の一員ではありますが、博物館は学芸員だけではありません。今日何度もお話に出て来たように、ユーザーのコミュニティですとか、事務職・ショップ・警備の人、様々なたくさんの人と関わりながら仕事をしていく、その中でも特に博物館の方針を決めたりとか、こういう面白いことをやっていこうとか、博物館を引っ張っていく、そういう人が学芸員になっていきます。そういう人たちを日本に育てていくために、大学

と、博物館の現場と、それぞれできることをこれからも一緒に考えていけたらなと思います。ありがとうございました。(拍手)

山田

では岡野さんお願いします。

岡野

はい。先ほど学芸員やって、博物館の館長やってというお話させて頂いたのですが、皇學館に来て20年、学芸員の資格を取る、取らないにかかわらず、日本の神社界に結構な教え子が出て行ったと思うのです。神社は大きいところ、小さいところ色々あると思いますが、それぞれ文化財を持っているわけです。日本という社会は神社に限らず、色々なところに文化財や長い歴史を抱える、そういう社会に私は卒業生を送り出して行っている。そこに博物館学や、文化財を保護するという姿勢ですね、これが教え子たちを通じてこの国に根付いていけば、それが広い意味のミュージアムなのだろうと。ですから、博物館とか相当施設とかそういうのは関係なく、日本に文化を守る土壌、これを作り続けていけるよう、今後とも頑張っていきたいなど、そういうふうに考えています。(拍手)

山田

ありがとうございます。では石原さんお願いします。

石原

学長が居られたら言いたいと思ってたんですが、学長さん帰られたのでちょっと残念です。大学が法人化される前くらいから、大学の色々な委員会に参加させていただいて、私は一貫して三重大学に大学博物館作りましょうっていうことを申し上げていました。それは、大学の先生方が今まで長いことかかって大学で残された研究っていうものが、元の資料がみんな残らないっていう問題です。大学の先生の図書が、いつも古本屋に出るっていうような、そういう状態はおかしいんじゃないかっていう話をしたことがありまして、大学の情報、持っているものは非常に膨大で、大学博物館があることによって、情報の流失と言うのを防ぎ、博物館はメディアであるという感覚のもとで発信できるセンターみたいなものが必要なんだろうと。そのために大学博物館が必要であると言うことを、ひとつ考えております。

それからもうひとつ、ちょっと難しい話になるかもしれませんが、日本人の博物館はみんな良い子の仲間過ぎます。博物館が博物館の批判をするっていうのは殆どないわけで…。これは非常に困った話で、普通、文芸だったら文芸評論があり、スポーツだったらスポーツ評論があり、アニメだったらアニメ評論が…。だから博物館っていうこの知的世界に評論がないっていうのはおかしな話で、博物館を中心とした博物館評論というものがきちっと、これから構成されていかなければいけない。もう遅いと思うんですけども、それでもやらなきゃいけないと言うふうに思います。それと同時に、逆に考えれば、博物館には表彰システムもないんですね。一年間に、良い展示をした、素晴らしいと業績を評価するそういうシステムそのものも立ち上げていく、そういうふうにして博物館をもっとしっか

りとみんなで支えていかなければならないと、そう考えています。(拍手)

山田

はい、ありがとうございます。(拍手)では佐久間さんよろしく申し上げます。

佐久間

はい。では、今日学生の方も多いので、先ほどもありましたけども、学生の方にまずメッセージを送りたいと思います。これから学部であれ大学院であれ、研究をしていくときに、自分の研究っていうのを、本当に自分の小刀になるものだと思って、もしかしたら薙刀になるかもしれないけど、何か自分が未来を切り開くときの刀になるんだろうと思って、それをちゃんと磨いてください。それが皆さんの進路を切り開く可能性は結構高いです。

そうしたときに、それを自分の学会の中だけじゃなくてね、周りに、どうやったらわかりやすく話せるだろうか。意外とみなさんのお父さんお母さんに、俺がやってることはこういう価値があるんだと、きちんと理解してもらうのは難しい話だと思います。僕自身も難しかったです。お前のやってることはどうやって飯が食えるんだと。それを説得するのはそう簡単じゃないと思うけども、でも少なくともそれに価値があるんだと思ってもらって、なんとなく許してもらえると、そこまではぜひ頑張ってみてください。まあお父さんお母さんが無理でもね、おじさんお婆さんあたりは狙ってみるとか、そういうのは大事なトレーニングだと思いますし、もっと言えばそれが、僕らの分野だったら自然観察会とか、歴史散歩だったりとか、そういうところにも積極的に関与して、普通の人にちゃんと伝わる言葉で、でも自分の研究分野での正確性を維持してしゃべれるかどうかと言うのはトレーニングだと思いますから、ぜひやってみてください。

そういうのは、採用試験と言う形でそこが量られるかどうかは分からないけど、それは皆さんがやっていくこと全てに滲み出ていくことだと思います。それは学術世界、大学に残ったとしても、その言葉を使えるトレーニングっていうのは絶対に無駄にならないはずですよ。だからそれを頑張ってみてください。

それから、その他の皆さんも、博物館の一オーディエンスではなくて、博物館の未来を作る一人なんだと言うことで、いろんな形で学芸員を育ててあげてください。特に若手の学芸員っていうのは、あなたがやっていることはこういうふう面白いよ、とかっていうのは、私がそうやって受けてきたのと同じように、もしかしたらそれが一番の養成課程だと思いますんで、是非積極的に関わってあげてください。それから、自分の疑問をぶつけてみる、それは、相手には答えるトレーニングになりますから。そういうことの中でモチベーションを育ててあげて下さい。先ほどの話にもありましたが、一番実は難しいのは、学芸員のモチベーションを高めること、維持すること。お金よりもモチベーションです。モチベーションがあれば、お金はついてきます。お金がなくてもできることはあります。だけどモチベーションは買えないんです。だからそれは、活動の中で、あるいは市民との交流の中で、あるいは学術界での交流の中で、お前がやってること、すごく面白いよっていうのを、大学側からもぜひエンカレッジしてあげて下さい。

本当に、博物館の世界で評論とか論争とかが無いっていうのはすごくマズイ状況だと思

いますし、理論と実践の往復がもっともっと必要なんだろうと思います。我々も博物館の世界の中でそうしたことを努力していきたいし、そういうことを学術のベースにきちんと乗せていくために、大学とのパートナーシップは重要だと思いますので、そうした形で、いい養成課程を将来に築いて行けたらなあと思っております。どうもありがとうございました。(拍手)

山田

本当にパネラーの皆様、貴重なご発言をありがとうございました。それでは本日の博学連携シンポジウムはこれで閉会にさせていただきます。閉会にあたり、大変お忙しいなか駆けつけてご参加いただきました清水潔皇學館大学学長先生よりご挨拶をいただきます。どうぞよろしくをお願いします。

清水

ご紹介いただきました清水でございます。今日、このシンポジウムを共催させていただきました三重県総合博物館、三重大学、そして皇學館大学、この3者に共通する使命は、この地域の学術文化の向上、また市民文化の向上を通して地域の創生を図る。この共通した大きな使命や役割がございます。そんな中で、特に博物館の学芸員の養成をどうしていったらいいのか、どういう問題があるのか、またそもそも博物館のこれからの未来像、課題、そうしたことについて、大変本質に迫る貴重なご意見を賜ることができたと思っております。

ここにご出席いただいた皆様は、先ほどお聞きしておりますと、この三重県の博物館関係の方々、あるいはその養成に関わっている方、そして博物館を目指そうと言う若い学生諸君で構成されていると思いますけども、本日のこのシンポジウムは、博学連携シンポジウムとして、今回初めての企画でございました。私自身も途中からではございましたけれどもお聞きしておいて、大変有益な示唆をいただきました。今後の大学の教学の充実のために、そして地域の、博物館を中心とした文化の向上の為に、本日のこのシンポジウムの内容が、有益な示唆をお互いに共有することができたとすれば、本日のシンポジウムの開催の意味も大きかったのではないかと思います。

最初の企画でございましたので、特に今日基調講演をいただきました佐久間先生をはじめ、それぞれ海の博物館の石原先生、三重県総合博物館の中村先生、皇學館大学の岡野先生はじめ、コーディネーターをお勤め頂きました山田先生にお礼を申し上げますと共に、本日熱心に最後までご清聴いただきました会場の皆様方に、心からお礼を申し上げまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

山田

進行役の不手際で時間が押してしまいまして、お詫び申し上げます。それでは、これで本日のシンポジウムを閉会させていただきます。ありがとうございました。(拍手)

それではお帰りの際にぜひアンケートをご記入いただきご提出をお願い致します。そして懇親会にご出席いただける方は私も含めてご案内いたしますのでどうぞいらっしゃってください。

ユーザーを育て博物館コミュニティを築く

—博物館を社会の中で活かすしかけとしての人材養成プログラム—

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館主任学芸員）

1. 博物館ってなんだろう

社会の中の博物館が持つ機能の可能性を考えてみたい。地域の文化アーカイブスとして、地域のアイデンティティを形成するための装置としての博物館の機能は広く知られているだろう。集まった情報を整理・再編集して（つまり研究して）わかりやすく発信する研究機関でもある。ユーザーの側から言えば社会の中で「新たな気付き」を得る場、そして他のユーザーと出会う場でもある。そして、学校にとっても博物館は様々な利用が可能な場であるが、学校利用は一生使える博物館という学びの場への導入の機会であることを大切にしたい。また、大人にとっても貴重な学びの場である。大人が博物館で学ぶというスタイルを確立することも重要だろう。

自然史博物館というと子ども向け、博物館には古いものが多い＝刺激なんてない、ミュージアムは静かに一人で学ぶ場所というステレオタイプな印象が広がってしまっている現状がある。その一方で上述のような博物館の機能は、地域での人材養成、地域の活性化、地域の価値創出においてコアとなるような賑わいの場でもある。博物館は図書館と同等あるいはそれ以上に都市の文化的活動コアとしての可能性を持っている。博物館が都市の文化的コアを草の根から積み上げることの価値は極めて高い。本稿ではこうした博物館の可能性を広く考え大阪市立自然史博物館の活動を例として考えてみたい。

2. 博物館が機能するには何が必要か

- ・博物館はスタンドアロンの組織ではない。博物館の僅かなスタッフだけで地域の隅々までメッセージを送出することは困難である。網羅的な情報収集もまた不可能である。博物館にパートナーが形成されることで、情報の集まり方、送出能力は高まっていく。
- ・これは普及教育・資料収集・そして研究面においても同様である。大阪市立自然史博物館を例に取れば、その160万点に及ぶ自然史資料はアマチュア、外部の研究者との連携によって集まってきたものであるし、研究利用は学芸員だけがするのではない。資料を活用するネットワークがあってはじめて活用が進み、資料の価値は高まっていくのである。教育活用も、博物館だけでプロモーションしていても声の届く範囲も、マンパワーも知れている。協力してくれる教育センター、教員ネットワークなどがあることでその活用は大きく進んでいく。
- ・行政のネットワーク、利用者のネットワーク、研究ネットワーク、NGO ネットワーク、そして他の博物館など様々なネットワークの中で博物館は機能していく。

3. 博物館にはどのようなスタッフが必要か：スタッフの構成と学芸員制度

・学芸員は博物館法に「博物館に、専門的職員として学芸員を置く」とあるように博物館の専門職員としての国家資格となっている。しかし、博物館は学芸員だけで運営しているわけではない。必ずしも専門職によるガバナンスが行なわれているわけでもなく、行政経営や地域の教育制度など様々な外部事情を背景として持つ多様な事務方と学芸員とで博物館内部で対話をして「あるべき博物館像」を共有することが現在求められている、しかし多くの場合難しい博物館の運営スタイルでもある。

・こうした対話において博物館は前述のように市民社会の一角を締めているのだという視座は重要な視点である。博物館学的には「市民の中の博物館」の頃から「対話と連携の博物館」に至るまで繰り返されているテーマではある。今日の博物館経営論の大きな命題の一つであろう。「博物館の使命（ミッション）」、社会に対する信任の基礎である「行動規範（倫理規定）」がなんのために重要視されているのか、市民社会の中に博物館があるという意識は重要であり、このもとで学芸員意識「キュレーターシップ」も形成されつつある。対話の一方がそうした理想を持つだけでは不十分で、博物館経営論は博物館の日々の経営を担う事務方にこそ重要である。

同じように展示論や資料保存論は学校連携を担当するミュージアムティーチャーや博物館利用を教える教育学部教員、そしてボランティアコーディネーターにもぜひ持ってもらいたい素養でもある。

・博物館学を収蔵庫の資料を扱い、展示を考え、研究を行う、いわゆる学芸員だけに閉じ込めておく必要はないのではなかろうか。事務方も、フロアで子どもたちに接する案内員や解説スタッフ、警備スタッフ、ミュージアムショップ関係者もそしてボランティア（の少なくともリーダーたち）も、多かれ少なかれ博物館の運営を担っており、ユーザーの博物館体験を大きく左右する可能性を持っている。関係者が博物館とは何をするとところなのか、を共有することでどれだけ組織の力は向上するだろう。

・博物館学は博物館の価値をステークホルダーたちにも共有させる使命を持つ。とある博物館が理想を掲げていると言うだけでなく、博物館とはどうあるべきか、どういう可能性を持つか、どのように考えるべきなのか、その視座を定める議論は博物館学や社会教育学などの諸分野が重要な舞台となるだろう。ステークホルダー、すなわち、政治、行政機構、何よりも市民に浸透する博物館学が必要である。専門家養成はそうした基礎の上に初めて成り立つはずである。そして専門家養成は果てがないとも言える。その専門家の立っている状況に応じて必要となる知識も千差万別であろう。それぞれに専門家として博物館に関わる学芸員は、必然的に永続的に自己研鑽や研究が必要とされるはずだ。学び続ける動機付けと現在の博物館課題を見つめ続け必要な要素を考える学術界の体制をどのように作れるか、が大きな課題だろう。

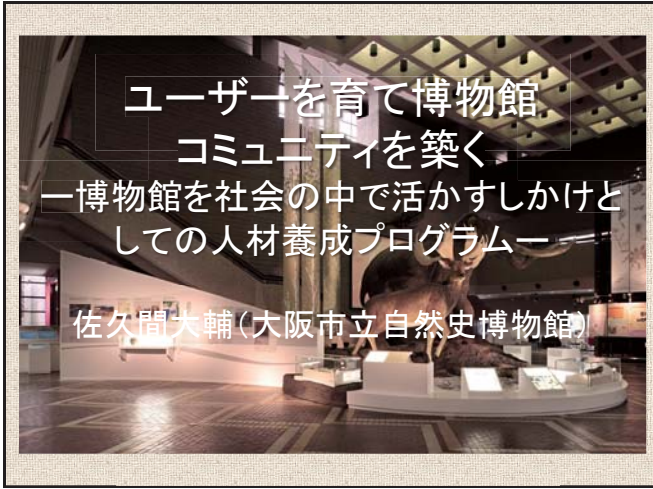
・正直なことに博物館の現状は非正規雇用の学芸員が半数を超え、公立直営館では高齢化が進むなど活性化の大きな障害となるような重大な問題を抱えている。博物館の重要性・可能性・何よりも楽しさを社会で共有することに積極的に取り組んでいかなければならない。

4. コミュニティとともに成長する博物館

・大阪市立自然史博物館のもっとも重要な資産は何か。重要標本もある、建物もある。その中でも、長年に渡って形成された分厚いユーザーコミュニティがもっとも重要なものであると考えている。60年を超える歴史を持つ友の会は1700世帯に迫り、その「卒業生」たちも様々な形で博物館をサポートしてくれている。あるものは研究者に、あるものは教育に、そしてアマチュアや地域の自然保護運動の担い手として活躍する博物館につながりを持つ人々は様々な横にもつながり博物館コミュニティを構成している。彼らを通して博物館のメッセージは各地に届き、また現場の状況が伝わってくる。100人の学芸員よりもこれら数万人のユーザーコミュニティは重要といえるかもしれない。このユーザーたちが少しずつ感度を上げていくことで大阪の自然を見つめるセンサー網の精度は劇的に変わっていく。博物館コミュニティの成長とともに、博物館の資料は充実し、相互に刺激した活性化や魅力的な活動が生まれ、さらに理解者を増やしていく。大阪市立自然史博物館で起きていることはそういうことである。博物館コミュニティをパートナーとした博物館運営は市民参画であり、社会共通資本としての文化施設の社会的な管理でもある。博物館の運営を鍛え上げ、社会の中に機能させていく。

・ユーザーとの対話はまた学芸員や博物館スタッフを育てても行く。ユーザーの眼は、時として非常に厳しい。形式的な美辞麗句は彼らに通用しない（特に大阪では）。博物館がどのような自然に対する眼差しを持ち、どれだけの熱量を持って社会に関わっているのか、そこが問われてもいる。

佐久間大輔（さくまだいすけ） sakuma@mus-nh.city.osaka.jp
twitter: [@sakumad2003](https://twitter.com/sakumad2003) facebook www.facebook.com/sakumad



自己紹介

佐久間大輔(さくまだいすけ)
 48歳 神奈川県横須賀市出身
 twitter sakumad2003
 facebook www.facebook.com/sakumad
 sakuma@mus-nh.city.osaka.jp


大阪市立自然史博物館に入ってもうすぐ20年。専門はキノコだったり里山のことだったり。
 ある人はIT・データベースの人だと思ってるかと思えば防災とかNGO連携のことにすごく時間を使っていたり。

博物館ってなんだろう

- 博物館には多様な役割があるはず


1. 地域の文化的アーカイブ、アイデンティティの拠り所→「陸前高田市立博物館」の標本レスキュー復興に関わる理由
2. 価値を生み出す研究機関として
3. 気づきを生み出す場所として
4. 他のユーザーと出会う場所として

「岩手博物界の太陽」鳥羽源蔵 コレクションとしての高い付加価値




- 明治期のナチュラルリストにして、後の師範学校の博物学の教授
- 植物・コケ・地衣類・菌類・昆虫・貝類・地質学・化石など多様な分野で東北の第一人者。新発見の業績も多く上げている
- 地元では今も尊敬されている
- 自然史標本のレスキューは地域の文化財の保全でも有り、今後の博物館復興への基礎と考える行われた。
- 地域のアイデンティティは復興に重要

博物館の情報の核＝標本庫



大阪市立自然史博物館の標本を基礎に作られた植物関連の生物多様性情報

- 大阪府植物誌
- 大阪府レッドリスト
- 奈良県植物誌(作成中)
- 近畿地方の苔類(児玉コレクション)
- 和歌山県産シダ植物標本目録(真砂コレクション)
- 近畿地方の保護上重要な植物
- 大阪府レッドリスト
- 奈良県レッドリスト
- 三重県レッドリスト
- 堺市レッドリスト、上野市レッドリスト...



展示活動、 教育普及、 収集保管、 調査研究は 個々に完結しない

相互に連動していることが、博物館の魅力となる

展示—アマチュア育成—良い標本 —良い展示の循環

- 良い展示、活動は興味のある人を引きつける
- 良い指導は良い標本採取につながる
- 博物館資料の充実、研究活動へ
- その成果として良い展示へ
- 場合によっては自然保護へも活用される
- でもその背景には指導者である学芸員が、どういう興味を持っているのか、どういう研究を背景に話しているのか、開示が欠かせない
- **顔の見えることの重要性**



展示風景



議論の場として



- 大人が楽しめる
- 学芸員が常駐して議論ができる

博物館のゴールは、展示を見に来てもらうことか？

個人に気づきの機会を与え、
よりよい社会にすることではないか

博物館に来れば、 野外へでかけたくなる

- そこに行けば、例えば、「うちの近くにそんな場所があったのか」と出かけたくなるような仕掛け。普通の場所を観察コースとして紹介。
- 野外に行つて、わからないことを博物館に訪ねてくる、フィールドと博物館のループをつくる。そのための学芸員相談カウンターと参考資料
- 専門家と市民との日常的な接点。
→これはビジターセンターも同じではないか？



市民を自然へいざなう

- 自然を語るための博物館の展示は、展示室内で完結しません。
- 大阪各地の自然環境へと市民を誘い、またアマチュア研究者の楽しく、奥深い道へと誘います。



では、市中への浸透はどうする？実践例

うまいもんから考える自然



今は食べられていないキノコも
稲米のワルメ食材



キノコ狩り
京都府の自然環境センター



野山にも山の雑木林にたくさん生えるヤマドリタケ科のキノコ。このキノコは近縁のヤマドリタケ科のキノコを中心に世界中で人気の「舞茸」になります。日本のヤマドリタケ科でも新種が数種発見され、品種を改良してあるシートが売れば十分商品になるでしょう。研究を続ければ社会でもできるかもしれません。「山の恵」の中には、今は採れなくなっているキノコも数種ありますが、それが貴重であるから、という可能性のある種が沢山あります。



大阪の地震を考える特別展を 2008年に開催



- 2008年10月25日から12月8日まで 約1万人が来場
- このときアスぺリティーは大きなトピックだった



博物館は防災教育拠点となりえるか？

- 科学的な災害の理解につながる
学芸員に質問などを投げかけることで理解が深まる
- 冷静に議論できる
- 展示に対する信頼性は高い
- 学校団体なども多く訪れ、来場者層をそれほど選ばない
- アマチュアを含め、指導者層に最新の知見を浸透させることができる。

出会う場所



フェスってなに？ “自然派市民の文化祭”として

大阪府立フェスティバルは、大阪府の各地域に開かれさまざまな活動が行われます。地域の特色を生かしたイベントを通して、自然派市民の文化祭、イベントを通じて200以上の団体が参加し、展示・体験・交流などの活動、一般市民は自然派市民の文化祭の開催の一環としてさまざまな活動に参加。100以上の団体が参加し、展示・体験・交流などの活動、一般市民は自然派市民の文化祭の開催の一環としてさまざまな活動に参加。

イベント当日までの道のりは約半年！

企画の準備、開催の準備、開催当日の運営、開催後の振り返りなど、約半年の期間をかけて準備を行います。

企業家の支援を呼び、不安定なフェスティバル運営...

地域の活性化や文化の発信、市民の交流を目的として、企業家の支援を呼びかけ、不安定なフェスティバル運営を行います。

出展側から

- 自分が面白いと思うこと、大切に思うことを人に伝える
- これに出すための工夫
- 出した手応え・新たなメンバー
- あそこの団体と知り合えた

来場者側から

- こんなディープな世界が！
- 見るだけじゃない博物館(という場)

ではそんな博物館に求められる学芸員像は？

- 資料に向き合うスキルと研究能力
→もちろん必要、ただしそれだけではない
- 地域の中、市民の中で学術を取り扱う、という大学や試験研究機関とは違う能力
- 他の社会教育施設との比較を少ししてみる(学芸員制度を定める博物館法は、社会教育法の下)

図書館という「ユニバーサルサービス」

- 図書館はどの町にもある。
- 知識の源泉は図書にある、なのでわからないことは「図書館で調べる」は一般的(しかし最近では「ググる」に取って代わられつつあるとも)。小学校の学習内容にもある。「博物館で調べる」はそれに比べると敷居が高い
- どの町の図書館に行ってもだいたい期待できる内容は同じと言われてきたが、最近では様々な工夫も。



By Kaikidai - 投稿者自身による作品, CC 表示-継承 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=18537782>

公民館：社会教育主事

地域課題解決型コーディネーター

- 公民館での講座企画は、地域住民のニーズの掘り起こしと運動。
- 地域住民の今示しているニーズ、地域が潜在的に持っている魅力や課題の掘り起こしがうまく行けば、ヒット講座になる。→住民サークルの形成、活性化
- 博物館のような専門領域中心ではなくより地域密着

社会教育施設

アウトプットの仕方に違い

- 博物館**
収集活動：標本資料
研究成果：研究論文、本、WEBコンテンツ
普及行事：人材、コミュニティ 友の会や連携団体に蓄積
- 図書館**
収集活動：時にはコレクションに、しかし多くの場合、蓄積されない
研究成果：？
普及行事：コミュニティ築きにくい、コンテンツも？
- 公民館**
ほとんどの活動は一過性
住民のサークルができれば成功、館としての蓄積は？

コアになる人材の見える化が必要

- 学芸員
専門性(知識、学術的な人脈、学術的生産性)
個人として積み上げなければならないものが大きい
館の個性も大きいので規格化した教育がしづらい
- 司書
図書資料及び図書を活用した教育
個人としてのスキルが蓄積されにくい
本当にそうか？例えば科学書籍の読み時のスキルは属人的。児童書だってそう。
- 社会教育主事
本来地域の核になりえる立場。
「頼れる黒子」としての蓄積をアウトプットしてもいいのではないかと。しかし行政縮小の時代の中で見えない黒子になっていないか？

学芸員

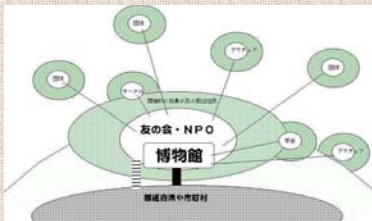
- 実に多彩なアウトプットを求められる
- 同時に実に多彩な質問対応、資料対応能力も。
- そんな「スーパー学芸員」はどこにでもいるわけではない

スタンドアロンモデルからの脱却

- 博物館が「単独」で発揮できる機能はそれほどない。むしろネットワークの要になるべきである。学芸員個人でも同様。
- 個人→友の会・メーリングリスト・フォロワーなどに集め、やりとり(広報や教育)
- 団体→登録団体に集め、連携(学術的指導・教育)
- 特に、重要な関係をもつ法人とは協力協定
- 他施設や機関と同戦略的なパートナーになれるか？

博物館の周りにコミュニティがあることで、博物館のメッセージはより社会に浸透していく

- 博物館と市民をつなぐ受け皿には、博物館友の会の役割は重要。
- 専門家だけでなく、普通のおじさん、おばさん、子ども、教師などがメッセンジャーになることで、自然への意識、知識はより浸透していく。
- このコミュニティを維持していくためには自律的組織が必要



なんでもできる大規模博物館の幻想

- 収集・研究機能が弱いのであれば、周囲の施設や専門家との連携・補完が不可欠
- 地元のキーパーソン・行政内部の人間を含めてネットワークがないと生きてこない
- 研究機能を持たないで人材育成のリーダーシップを取るのにはなかなか困難
→ 対話を積み重ね運営を工夫する必要

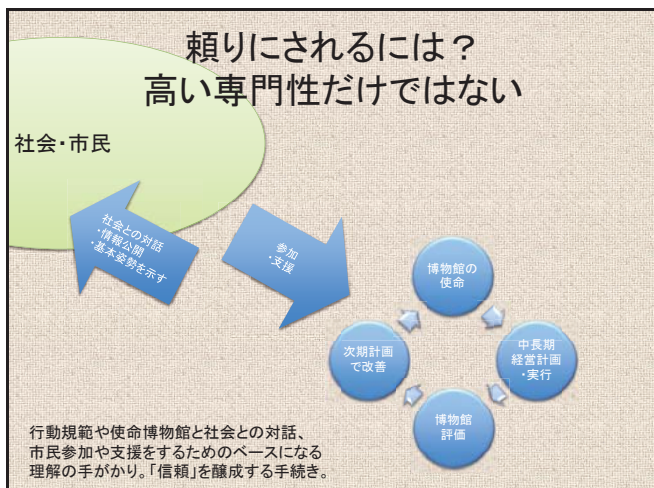
博物館の声はたかだか十数人の学芸員だけでは社会に届かない

- 博物館が社会に影響を与えていくためには、博物館のまわりに社会(コミュニティ)を築くことから
- 大阪270万市民に、890万府民に伝えるには圧倒的に足りない
- 誰を頼りにするのか？=博物館と関係の深い人達

自然史博物館をもっとも頼りにしている人は誰？

- 学校
- 地域住民 (日常の学習施設として)
- 域外の住民 (観光・行楽ユース)
- アマチュア (域外も含む)
- 自然関連活動指導者 (域外も含む)

リーダー養成として博物館から力を入れて教育プログラム



博物館の使命

- 博物館の「使命」 社会との契約
- 博物館の「評価」 使命がはたされているのかを確認し、改善する手段
- 博物館の「倫理」 活動のプロセス、手続きの原則を示し、社会的な信用を得る為に示す基本方針。「スタンダード」は何か、示すこと

博物館が使命を示すこと

- 博物館の職員、関係者が迷いなくその目的の達成の為に働く為のコンセンサス
- ユーザーが博物館を理解し、対話し、何を期待すべきなのかを知る為の手がかり。評価や支援の根拠にもなりえる
- 中期計画をつくるよりどころ、必要な資金調達や人員配置の根拠にもなりえる物

行動規範・倫理とは何か

- 社会的規範
- 良い目的は犯罪を正当化できない
- 仕方ないんだ、は身内でだけ許される論理
- 社会に説明をつけるための手がかり
- 社会から信用されるために必要なものとして 使命+ベンチマークとしての評価+正当な手続き

参考

- 日本博物館協会 博物館の原則・博物館関係者の行動規範
- 自然史系博物館のための倫理規定

大阪市立自然史博物館のミッション

自然史博物館の使命

- 資料収集保管
- 調査研究
- 教育・普及
- 展示

1. 大阪の「自然の情報拠点」として自然史博物館の機能を発展させていきます。
2. 社会教育施設として、人々の知的好奇心を刺激し、見つめる学習の援助を行います。
3. 地域との連携を促進してより広範な市民との交流に努めます。

大阪市立自然史博物館のミッション

4. 他の機関との連携を進め、ノウハウの交流に努めます。

- 地域の市民組織・社会教育機関との連携
- 地域の博物館の連携
- 「自然史博物館」の活動を拡大していく西日本自然史系博物館ネットワーク
- 研究機関学会との連携
- 次はユーザーネットワークだ

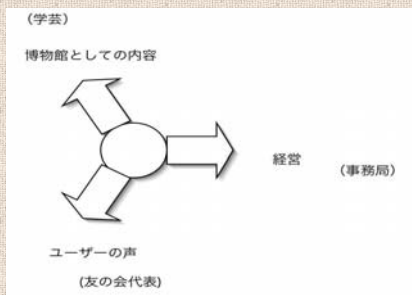
5. 経営の効率化

- 評価の指標は何なのか
- 求められていることに投資しているのか
- 入館者数だけなのか(冒頭の意味付け)
- 状況を知らない人のアンケートの数字より、よく知った人の厳しい意見のほうが大切
- どういうアウトカムを作っているのかを具体的な形にする努力

博物館の組織力を上げていくためには

- 学芸員だけではだめ
- 総務の事務スタッフ・広報関係スタッフ・学校対応のスタッフ、さらには日常的にお客さんに接するフロアスタッフ(券売・案内、警備、ショップなど)の博物館理解、行動の方向性が重要

どうあるべきか考える人、使って楽しいか考える人と事務局の引っ張り合いこそ健全



博物館のステークホルダーは誰でしょうか？

われわれは誰に対して責任があるでしょうか？われわれの博物館を所有している、あるいは利害関係を持っている、またはそのように感じているのは誰でしょうか？

- 納税者
- 公務員
- ビジネス業界
- 学術界
- 将来の世代
- 地方および国の政治家
- スポンサー
- 利用者
- 職員

いかに組織化するか

博物館学は学芸員だけのための講座ではないはず

- 「博物館経営論」を理解しなければならないのは誰か？
→学芸トップだけでなく、事務方トップ、さらには博物館を管轄する設置者側も、外部評価する人も。
- 「博物館教育論」はコミュニケーションをになうすべての内部担当者に必要かも。外部では特に学校関係者にも知ってもらいたい。
- 資料論も教育スタッフやボランティアが知っていることで、幅が広がるかも。

大阪市立自然史博物館での子どもワークショップの構成

- 教育スタッフ
+ 学芸員
+ 展示/標本
+ さらに学生ボランティア
- 展示室の一角を会場として利用、マットや低い作業台、縁台などと仮設の掲示板や飾り付けの区切りつつ見える環境で実施





学校利用で最近訴えていること

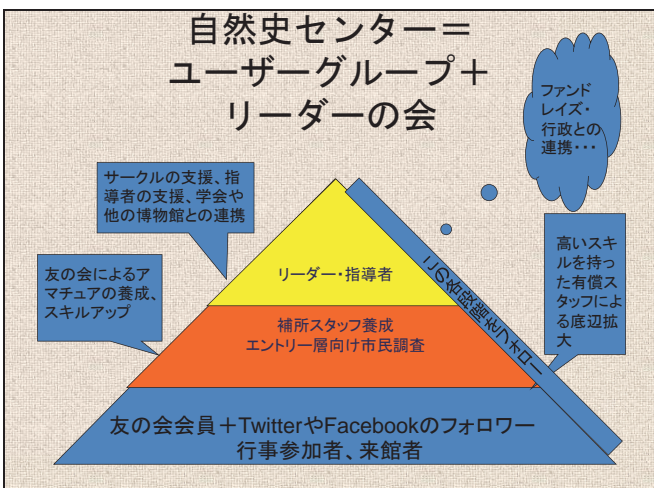
皆さんにはぜひ、
博物館へ実感を探しに、
そして世の中でみたことの
疑問を探りに、
これから一生の間に何度も博物館へ
たずねて来てもらいたい。
学生の間になにかそのきっかけを
作っていただければと思います。

対象となる教科

- 光村図書2年生(上)『こくご』『たんぽぽのちえ』
- 東京書籍2年生(上)『新しい国語』『たんぽぽ』
- 3年生理科『植物の成長と体のつくり』
- 生活科・理科『季節の自然』『身近な自然の観察』など

貸し出しできるもの

- たんぽぽの標本
- たんぽぽの写真
- たんぽぽの成長カード(タネ～花が咲き、また綿毛に)
- 先生向けの資料など



**ボランティアの養成は
普及教育活動**

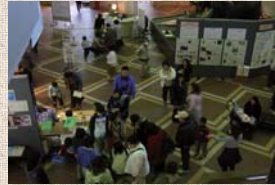
- 博物館は学んでもらうところ
- ボランティアにも「楽しく」学んでほしい
- 学んだことを活かす活動としての実際の行事
- ボランティアの導入によって、野外行事は2倍に増えたともいえる

活躍の場は多様

- 様々なイベントの中から参加したいものを選択
- 研修を積んでスキルアップ
- アマチュア研究者になって、今度は自分で企画も！

アマチュアの育成・支援

- 好きな事を科学や活動を通して社会に還元する存在
- 続けるためには交流の輪が必要



大阪自然史センターは 認定特定非営利活動法人

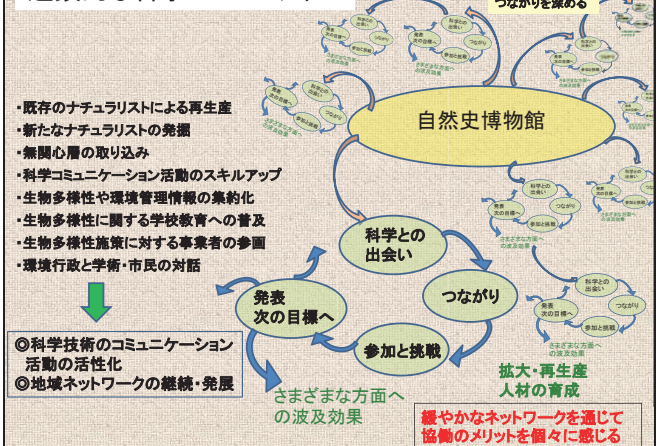
- 社会的に活動が認められたNPO
- 活動は多岐にわたりスタッフも充実
- ボランティアではなく、自らの「理想」を求めて活動中
- 詳しくはwww.omnh.net/npo/ →



ユーザーが望む博物館を 実現する回路

- 博物館にこう在って欲しいという希望と、行政の内情を理解するあきらめ
- これを超えて市民協働によって自ら実現
- 外部資金の獲得、経済的に安定な運営
- 行政では難しい、スタッフ、資金の柔軟性

連鎖的な科学コミュニティへ



博物館のステークホルダー

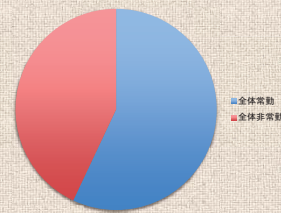
われわれは誰に対して責任があるでしょうか？われわれの博物館を所有している、あるいは利害関係を持っている、またはそのように感じているのは誰でしょうか？

- 納税者
- 公務員
- ビジネス業界
- 学界
- 将来の世代
- 地方および国の政治家
- スポンサー
- 利用者
- 職員

いかに影響を与えていくか

学芸員の継続性

半数に近づく非常勤学芸員



運営形態により異なる情報

図3-1 常勤学芸員の所属先



図3-2 有期雇用常勤学芸員の所属先

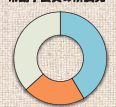


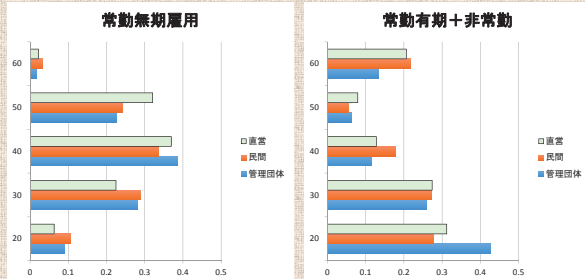
図3-3 非常勤学芸員の所属先



人材の継承

若手が少ない！

足りない人材の補い方は直営と
管理団体で異なっている



多様な可能性を持つ博物館 →博物館スタッフの発展が重要

- スタッフのスキルアップが重要
しかし、OJTが効きにくい雇用構造
- 必要なスキルも多様、時代によってどんどん変わる
(ちょっとまでネット上のコミュニケーション能力なんて博物館の議論になかった)
- 学芸員同士の議論の場も必要だが、これまで博物館学は案外現場と別に発展

→大学側の養成講座は、現実の博物館運営に関わりウオッチし、これから何が必要かをよく見る必要。その上で、スキルアップに関与する事ができないか？

人材化流動する中で必要なスタッフを 採用して博物館を構成といっても

- 地域の課題、地域の資産をよく知っている人材は替えが効かない
- そもそも「博物館のマネジメント」に精通している人材はほとんどいない
- その博物館のカルチャーも重要

→今ある人材のスキルアップがますます重要になる。

完成品型学芸員養成から バージョンアップ型養成へ

- 社会・博物館と対話し、スキルアップをはかる。
- 売り切りのWindows98型モデルから、バージョンアップでどんどん機能アップするiOS型の学芸員へ。
- 学芸員養成が地域の文化政策関与や文化創造都市政策関与に直結、また当該学問分野の強化にも。
- この実現のためには博物館界と大学が対話を続けていく必要がある。

まとめ

- 博物館は多様な機能を、他の社会教育施設に比べても持っている
- 学芸員が博物館のすべてを担うことはできない
- スタンドアロンモデルを廃し、様々なスタッフや他機関との連携、市民参画などさまざまな手段で機能実現を図るべき。
- 学芸員を含め、博物館関係者すべての機能アップに、博物館学が貢献できる可能性は高い。
- 送り出して終わりの養成課程からともに現代の博物館像を探る養成課程となることを願う。

自然史博物館の課題

- 自然史系博物館はどこにでもあるわけではない
- 大阪にも大阪市立自然史博物館のほかには小規模館が高槻・岸和田・貝塚に、箕面に昆虫館
- 兵庫や和歌山、滋賀も同様の状況
- 京都、奈良には拠点施設がない
- 濃いコミュニティは形成されるが、社会全体への浸透には時間がかかる

博学連携シンポジウム

大学の“学芸員養成”教育と博物館 —文化の裾野を広げるために—

主催：三重県総合博物館・三重大学・皇學館大学
後援：三重県教育委員会・三重県博物館協会



平成28年

2月29日 月
13:30 ~ 15:30

13:00 受付開始

会場
三重大学メディアホール
(総合研究棟Ⅱ 1F)

定員 100名
(入場無料・先着順・事前申込不要)

このシンポジウムでは、地域と博物館と大学をつなぐ人材の育成という広い視点から今後の“学芸員養成”教育について展望します。

博物館は、地域の自然・社会・生活をフィールドにし、地域づくりに貢献しながら、自らも学術的・文化的に活性化し高まっています。このような地域との関係は、今後の大学にも強く求められています。

その際に鍵になるのが地域と博物館・大学をつなぐ人材です。そのため学芸員養成教育に当たっては、1) 地域との新しい関係を築く固有の学芸員の養成だけでなく、2) 地域資源と博物館を結ぶ人材の育成、さらには3) 博物館に親しみ、その価値を理解する幅広い利用者の形成という、広い視野からの取組が必要とされてきています。

そこで、基調講演に大阪市立自然史博物館から佐久間大輔氏をお招きしました。同館は50年以上前から市民との連携を続けてきた歴史を持ちますが、佐久間氏には地域と結びついた博物館や学芸員のあり方、そして市民と真につながる博物館教育について問題提起していただきます。それをふまえ、大学や博物館関係者によるパネルディスカッションを通して、テーマに迫ります。

基調講演 13:30~14:20

佐久間大輔 (大阪市立自然史博物館主任学芸員)

「ユーザーを育て博物館コミュニティを築く

—博物館を社会の中で活かすしかけとしての人材養成プログラム—」

パネルディスカッション 14:30~15:30

パネリスト：石原義剛 (海の博物館館長・三重大学客員教授)

岡野友彦 (皇學館大学文学部教授・佐川記念神道博物館館長)

中村千恵 (三重県総合博物館学芸員)

コーディネーター 山田康彦 (三重大学教育学部教授)

三重大学博学連携推進室事務局 (附属図書館内)

TEL 059-231-9083 E-mail lib-kikaku@ab.mie-u.ac.jp

三重県総合博物館

TEL 059-228-2283(代表) E-mail MieMu@pref.mie.jp

皇學館大学地域連携推進室

TEL 0596-22-8635 E-mail kikaku@kogakkan-u.ac.jp



※駐車場がないため、公共交通機関をご利用ください。

近鉄江戸橋駅下車、徒歩15分。または津駅東口(バス停4番乗り場)よりバスで10分「大学前」下車、徒歩5分。

博学連携シンポジウム

「大学の“学芸員養成”教育と博物館—文化の裾野を広げるために—」アンケート結果

1. 参加者 114名

- ・ 大学生（含、大学院生） 47名
（内訳 三重大学44名、皇學館大学2名、立命館大学1名）
- ・ 大学教員 24名
- ・ 大学職員 12名（含、神戸大学地域連携推進室1名）
- ・ 博物館職員 11名
（総合博物館、朝日町歴史博物館、海の博物館、桑名市博物館、四日市市立博物館、石水博物館）
- ・ 一般市民 18名（含、博物館ボランティア）
（津市、松阪市、大紀町、名張市、鈴鹿市、桑名市、名古屋市、大阪市など）
- ・ マスコミ 2名（中日新聞、ZTV）

*参加者は100名定員の会場に114名の参加者があり、新たに椅子を出して対応するほど盛況だった。

2. アンケート結果

1) 回収数 66 （回収率 57%）

2) 総合評価（「この企画を、総合的に見てどのように評価されますか。」）

- | | |
|-------------|----------|
| ① とても良かった | 30 (45%) |
| ② 良かった | 24 (36%) |
| ③ 普通 | 1 (2%) |
| ④ あまり良くなかった | 0 |
| ⑤ 良くなかった | 0 |
| ⑥ 未記入 | 11 (17%) |

*アンケート回答者の中で、「とても良かった」が30名（45%）で、「とても良かった」と「良かった」を合わせて54名（81%）となり、本シンポジウムは参加者に大変好評だった。

3) 主な感想・意見

（基調講演について）

- ・ 論旨が一貫していて、大変説得力があり、感銘しました。博物館のあり方について刺激的な話で有益でした。
- ・ 「知的好奇心」を核とした子供・家庭と博物館や地域のつながりという意味でも、博物館の担う役割は大きいと感じました。
- ・ 「ユーザーを育てる」という視点から考えるというのは、私にとって新たな視点でした。地域の文化や歴史をつなげていくだけでなく、作り出す場という新しい

見方ができるようになったと思います。博物館の周りにコミュニティが重要であるということをおぼせていただいた。

- ・ 博物館の目指すゴールとして、一般市民に興味を持ってもらい、フィールドに向いてもらう事であるというのも、改めて考えてみて初めて気づく考え方だった。
- ・ もっとポイントを絞って、深く長く話を聞かせていただきたいと感じた。
- ・ 学芸員養成課程や大学が有する博物館について、先生の経験に基づく指針やご意見について少し詳細なご意見を聞かせて頂ければ、より良かった。

*基調講演の内容は、博物館が独立して存在するスタンドアロンモデルから脱却して、地域及びその人々とつながることで単に教育普及だけでなく、資料の収集保管、調査研究、展示活動というすべての面で向上していくことを、実際の事例に即して示すものだった。それは必然的に博物館職員と地域の人々との相互活動の重要性を伴っていた。そうした講演の内容が現在の博物館や学芸員を取り巻く課題と解決の方向性を説得力を持って提示するもので好評だった。そして特に、「ユーザーを育てる」ことによって市民と連携し、コミュニティを形成していくという博物館の目指すゴールに共感する参加者が多かった。

ただ講演時間が少なく、内容が多岐に亘っていたので、講演全体には満足していたが、具体的な点についてより掘り下げることを求める意見も見られた。

(パネルディスカッションについて)

- ・ 短い時間でしたが、スケジュール、進行とも申し分ないものでした。会場との質疑応答の時間もつくっていただき、大変聞いていて快いものでした。
- ・ 博物館のあり方、学芸員の役割、採用の話までご意見を伺うことができ大変勉強になりました。文化財を保存するためには、地域住民の興味という支えが必要と感じました。
- ・ 博物館、学芸員、大学、ユーザー、いろいろな立場からの「博物館」の考え方を知ることができ、とても勉強になりました。
- ・ 「博物館に物が入った瞬間に物の命が失われる」という言葉が印象に残りました。博物館から生きた資料に来館者をつなげていくことが重要になってくるということもとても良く分かりました。
- ・ 一人あたりの（コメントの）時間がもっと長くてもよかったです。
- ・ もう少し質問の時間を多くとってほしかったが、それほど充実した内容だった。もっといろいろな話を聞いてみたかった。

*パネルディスカッションについては、短時間であったが、進行の仕方については理解が得られ、内容についても多様な立場からのパネラーの発言によって博物館のあり方や学芸員の役割等について、講演の内容をある程度掘り下げることができ、好評だった。博物館の資料の生かし方など、パネラーの具体的な発言に触発されたという感想も見られた。パネルディスカッションも時間の短さを残念に感じる声が見

られた。

(その他)

- ・今回は博学連携の中でも博物館から大学に矢印の方向性が向いていたように感じました。もし次回があるのなら、同様な内容で矢印の方向性が逆向きのものを行っていただき、学芸員を志し現状を打破する可能性を持つ若者の芽が伸びやすい環境を、現在働く方々に形成していただくきっかけになれば幸いです。
- ・大学の教育と博物館を結び付ける、非常に貴重な機会だった。三重大だけでなく皇學館大との連携が行われていたことで、「地域全体の文化」というものをよりイメージしやすかった。現在、養成課程を受けている学生側の発言があると、もっと良かったと思う。

*その他では、全体的な感想に加えて、今回のシンポジウムをふまえて将来を展望する意見が多く見られた。大学と博物館がより双方向性をもって連携していくこと、さらに総合博物館と三重大学と皇學館大学の3者が連携して地域の文化を形成していくこと、さらにこうした連携に学生ももっと参加していくように考慮していくことなどが指摘された。

(山田康彦)

シンポジウム開催の経緯について

2009年4月に開設された三重大学博学連携推進室は、当初は鳥羽にある海の博物館との連携協力・支援と、まだ計画段階で建設自体が危ぶまれていた新しい県立博物館の構想を推進することを、当面の目標としていた。財政的理由で三重県議会など建設に反対する声も根強いなか、旧県立博物館の関係者と共に、社会のなかで博物館の持つ意義を考え、確認するためのシンポジウムを、2009年から3か年の間、5回にわたり開催している。

紆余曲折の末、2011年6月によろやく新県博の建設が正式に決まり、博物館職員は準備に追われることとなった。そのため、少し落ち着くまで企画を中断することとしたが、2014年4月の開館後には殺到した入館者の対応で、やはり博物館側では連携企画を行える状況にはなかった。

しかしながら、博物館は出来てしまったらもう問題は解決したという訳ではない。大学と博物館とが手を携えて地域に根差した活動を展開し、地域文化を豊かにしていくという課題は、追求し続けるべきものであろう。開館に先立ち新県博＝三重県総合博物館と三重大学とは、地域資源を活用するための相互協力協定書を取り交わしてもいる。そして入館者数の面では順調に船出した新県博も、運営をめぐる行政的な環境は、決して楽観できるものではなかった。一方で大学側でも、地域連携という課題はその比重を益々高めるとともに、学芸員を養成するための教育課程の整備など、大学内在的な課題も抱えていた。

そろそろ大学と新県博と連携した文化事業を再開しようではないかという声が、博学連携推進室内で起こってきた。多忙を極める博物館職員の状況に鑑み、今回は両者が連携しつつも大学側が主導権を取って企画運営することとした。2015年度の春以降、推進室での議論の末、学芸員養成課程問題をテーマにシンポジウムを開催する方向で検討に入った。

2009年の博物館法施行規則の改正により、2012年4月から学芸員資格に必要な修得単位数が増加され、高度な学芸員を育てるためのより専門的なカリキュラムの構築に向けた議論が各地でなされていた。だが、私たちはそうした動向に必ずしも賛成ではなかった。学芸員のスキルは博物館の実務を通して鍛えられるものという認識があり、また大学の学芸員養成課程教育は、博物館に就職させるためだけにあるのではない、との思いもあった。シンポジウムの冒頭における布谷知夫館長（当時）の御挨拶中にもあるように、全国で毎年1万人もの学生が学芸員資格を取得しているが、実際に学芸員職に就く者は、嘱託職員を含めて100人ほど、率にすれば資格取得者のわずか1%に過ぎない。実際に学芸員となるための課程とのみ評価すれば、カリキュラムを維持するための講師の手立てなどコスト・労力面に鑑み、割に合うものではない。現実に学内でも、予算が削減され続けるなか、こうした資格課程を廃止すべきだとの意見も、公然と出されていた。

一方で私たちは、この間の連携事業を通して、市民社会のなかに博物館文化が根付いていくことの必要性と、その難しさも実感していた。学芸員資格の取得者は、博物館における実習経験などを活かして、たとえ学芸員の職に就かなくても、市民社会のなかで博物館文化の裾野を広げる役割を果たしてくれるのではないか。特に若い世代に博物館を身近なものとして認識させることに、学芸員実習は大きな意味を持っているのではなかろうか。また、大学と博物館とが連携を密にする上でも、学生たちの博物館との様々な関わりが重要であろう、とも考えた。

2015年9月に開かれた博学連携推進室会議において、そうした観点から、学芸員養成問題をテーマとしたシンポジウムの開催を決定し、基調講演をして下さる博物館関係者とパネラーを探すこととした。山田・塚本の2人で検討作業に入り、Ciniiなどで関連論文やネット情報等で関係文化事業の記録、SNSの発信等を調べた。佐久間大輔氏のお名前に行き当たったのは、そうした作業のなかであった。氏が所属される大阪市立自然史博物館は、博物館における「友の会」活動を日本で最も古く、かつ活発に行ってきた老舗的な博物館であるが、そのなかで、キノコについての学術研究を行いつつ、博物館のあり方について刺激のかつ魅力的な提言をされていたのが、佐久間氏であった。

私たちにとって一面識もない方ではあったが、県博関係者に相談したところ、幸いにも北村淳一学芸員が佐久間氏と旧知の間柄であり、また私たちの構想にも全面的な賛意を示して頂いた。意を強くして、大阪長居にある自然史博物館を訪ねたのが、2015年10月のことである。山田・塚本に加えて、北村氏にも同行頂いた。

私どもの考えと想いを伝え、シンポジウムの基調講演をお願いしたところ、大変ありがたいことに即座に快諾して下さった。以後、佐久間氏と合わせてシンポジウムで議論して頂くパネラーの人選に入り、三重大学からは、客員教授であり同時に民間の博物館を運営するお立場から海の博物館の石原義剛館長にお願いし、三重県総合博物館からは博物館学がご専門の中村千恵氏に登壇頂くこととした。

三重県総合博物館は、三重大学に加えて皇學館大学とも連携協定を締結している。両大学の連携協力も、今後の課題として意識していた。そのことに鑑み、皇學館大学にも今回の企画に主催者として加わって頂くことを依頼し、同時に同大学附属佐川記念神道博物館館長の岡野友彦教授に、パネラーとしてご発言頂くこととなった。なお、三重県教育委員会及び三重県博物館協会には、後援としての参画をお願いした。

当日は100人を超える聴衆を集めることができ、報告書本編でご紹介の通り充実した内容の基調講演と活発なシンポジウムとなり、企画者側としても大変嬉しい結果となった。

終了後は学内にある食堂パセオで御慰労がてらの懇親会を開いたが、その後も山田・塚本は佐久間氏を囲み、津駅近くの店でワインを何本も空けながら、終電時間まで博物館の将来を、大学の役割を、地域文化の構築の仕方を、熱く語り合った。

三重県総合博物館は、2016年の夏に、その運営をめぐり激震に襲われることとなる。ここではその詳細は省くが、改めて市民社会のなかに博物館文化の裾野を広げることの必要性と、それに大学が果たす役割についても、再認識することとなった。

本シンポジウムは、博物館と大学とが更に連携を深めつつ、地域の文化振興に資するための重要な一歩であると考えている。この報告書が広く読まれ、活用されることを願ってやまない。

末尾ながら、今回の企画にご協力下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

(塚本明)

2015（平成 27）年度 博学連携シンポジウム
「大学の“学芸員養成”教育と博物館
－文化の裾野を広げるために－」 記録集

2017 年 3 月

発行 三重大学博学連携推進室

（室長：加納哲）

（編集担当：山田康彦／塚本明）

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

TEL (059) 232-1211 (代)

<http://www.mie-u.ac.jp/hakugaku/index.html>
